

**等高線地形図を読み解き
百年前の武蔵野を歩く**
～武蔵野緑縁プラットホーム研究・情報発信事業～

報告書

2019 年 2 月

(NPO 法人) グリーンネックレス

目 次

0. 本事業の概要	3
0-1. 本事業の背景	3
0-2. 本事業の目的	4
0-3. 事業の実施体制	4
0-4. 協働研究事業の期間	6
1. 等高線地図から読み解く・「はけ」と「崖線」とは何か	7
1-1. 「はけ」と「崖線」の定義を巡る課題	7
1-2. 「はけ」「崖線」の学習素材としての可能性・意義の検討	8
1-3. 本研究における対象区域の設定	11
2. インタビューを通じた、百年の武蔵野の体験発掘	13
2-1. インタビューの目的と実施方法	13
2-2. インタビューの実施状況	16
2-3. インタビュー結果	18
3. 三鷹実踏による緑縁プログラムの検討	45
3-1. 緑縁プログラムの目的	45
3-2. 三鷹実踏による緑縁プログラム検討	45
3-3. モデル街歩きの実施結果	47
4. 地形図・インタビューから読み解く「はけ」の物語	51
4-1. 地形図から土地と人との関わりを考える	51
4-2. インタビューから見える「はけ」の過去・現在・未来	52
5. 「はけ」地形を楽しむツールづくりの検討	59
5-1. 検討の視点と方針	59
5-2. はけの存在と魅力を示す地図の作成	59
5-3. タブロイド版の作成の検討	61
5-4. WEB「はけの学校」の検討と制作	64
5-5. 街歩きプログラムのためのアプリ作成に向けて専門家ヒアリング	70
6. 今後の課題と計画	72
6-1. 課題	72
6-2. 今後の計画	73

0. 本事業の概要~~~~~

0-1. 本事業の背景

特定非営利活動法人グリーンネックレスは、J R中央線の三鷹～立川間の沿線エリアを中心に、環境共生型のまちづくりを実現するための活動に取り組んでいます。1999年に三鷹～立川間の高架化事業が着手されたのをきっかけに、沿線地域の市民が連携し活動をスタートさせました。2000年に沿線6市の市長と関係23団体を招いた「グリーンネックレス公開サミット」を開催。2002年には特定非営利活動法人（NPO法人）となり、市民・行政・大学等の研究機関、事業者等と連携しながらまちづくり活動を展開しています。現在、雨水の利活用への取組みを拡げるための中央線沿線の大学を連携した「雨の学校」、都市農地保全という観点からの民有緑地等の保全活動、環境配慮型モデル住宅づくり（小金井環境学習館）の企画・事業化などに取り組んできました。

こうした活動の中で、行政域を超えた地域の資源として、国分寺崖線に着目し、「はけの学校」を2013年よりスタートし、以下のような様々な活動を行ってきました。



図 0-1 はけのライブラリー設置候補地*1

- 2013年11月国分寺市恒例「ぶんぶんうおーく」参画：崖線実踏「野川源流」（参加者10名）、崖線実踏活動を「はけの学校」とし活動開始。
- 2014年～崖線実踏春夏秋冬実施（参加者計50名）
- 2015年「はけの学校」プロジェクトが東京都・セブンイレブン記念財団助成採択。
- 2016年11月東京経済大学地域連携センターと協力し、「シンポジウムはけ／崖線の新時代」@大倉喜八郎進一層館（参加者300名）
- 2017年6月はけの学校主催「縄文遠足」：国際基督教大学考古学林先生案内（参加者10名）

加者 30 名)

- 10 月はけの学校出前講座・早稲田実業学校初等科教諭グループ自主企画(参加者 11 名) 12 月～18 年 5 月まで 崖線実踏／高村薫小説「我らが少女 A」を歩く 計 3 回実施 40 名参加)
- 2018 年 2 月はけの学校プロジェクト「はけのライブラリー」設置＊1
(小金井市環境楽習館他)
- 2018 年 5 月まちカフェ連続講座「はけの地図を描こう」@学芸大学ノートカフェ
- 2018 年 6 月まちカフェ連続講座「はけの地図を歩こう」@学芸大学ノートカフェ

一方、2016 年 3 月、「国分寺崖線」を横断・縦断する都市計画道路が「第 4 次事業化計画」となり、大岡昇平「武蔵野夫人」の舞台ともなった歴史的・文化的な環境が失われる可能性も高まっています。

今こそ、「国分寺崖線」の価値、そしてはけとは何か、「国分寺崖線」を地形と地域の歴史から読み解き、その価値を共有すべきであるという認識の下で、事業提案を行ったものです。

0-2. 本事業の目的

多摩地域に住み、活動する市民・企業・大学・NPO が、国分寺崖線の魅力を学ぶための場を作ること、武蔵野地域に根差した歴史・文化・自然を守り、育む担い手を育てるため、以下の 5 点を研究・検討を行うことを目的として、本事業を実施しました。

- (1)国分寺崖線そしてはけとは何か、背景としての地形・風土・歴史文化の研究
- (2)インタビューを通じた百年の武蔵野の体験発掘
- (3)三鷹実踏による緑縁プログラムの検討
- (4)地形図・インタビューから読み解く「はけ」の物語
- (5)「はけ」地形を楽しむツールづくりの検討

0-3. 事業の実施体制

以下のメンバーで、研究体制を組み、協働研究実施した。

(1)体制

(研究代表)

野口由紀子	(NPO) グリーンネックス理事
椿 真智子	東京学芸大学人文社会科学系人文科学講座地理学分野教授
有賀 夏希	(株)東京地図研究社

鈴木 佳子	き・まま編集部(リュエル・スタジオ)、はけの学校
安田 桂子	はけの自然と文化をまもる会、はけの学校
前田 幸則	(NPO) グリーンネckレス一級建築士事務所代表理事
土肥 英生	(NPO) グリーンネckレス代表理事

(2)実施主体プロフィール

(NPO) グリーンネckレスは、J R 中央線の三鷹～立川間の沿線エリアを中心に、環境共生型のまちづくりを実現するための活動に取り組んでいる。

その事業内容の一つとして、「地域の環境に根差した生活・文化・コミュニティの場づくり」を行っている。国分寺崖線のまちあるき等を継続して行っており、はけの空間の歴史的・文化的な価値を発信・交流するプロジェクトを実施している。

(3)協力団体プロフィール

●東京学芸大学人文社会科学系人文科学講座地理学分野

東京学芸大学地理学分野は教員養成系大学としての教育プログラムを実施し、その基盤となる研究を行っている。

研究題材として国分寺崖線に着目し、はけを題材とする地域学習の視点と枠組みに関して研究を行っている。

●有限責任事業組合リュエル・スタジオ

小金井市を中心に活動する編集者ユニット。地域とのつながりを大切にしたいという思いをもつ編集のプロ集団である。

「はけ」にスポットをあてたミニコミ誌「き・まま」を不定期刊行している。

●はけの自然と文化をまもる会

はけの自然や文化が好きという気持ちで繋がっていた仲間が、野川と武蔵野公園を分断する、都市計画道路が優先道路に選定されたこと契機に発足させた市民団体である。市民運動として都市計画道路の見直しを行政に働きかけると共に、はけの自然と文化を守るイベント、伝える講座等を行っている。

●ココンブレンド・武蔵野から編集室

地域の情報を集めて発信する企画・編集工房である。

1982 年より地域雑誌「こんにちは小金井」を隔月で発行。’87 年に小金井から東京西半分エリアを拡大して「武蔵野から」に移行、2010 年まで発行していた。現在は企業・自治体・NPO などの広報誌やミニコミの編集を行っている。

●株式会社 東京地図研究社

東京地図研究社は半世紀にわたり、測量調査、地図編集、地理空間情報データ作成・設計など、さまざまな地図や地理情報に関する業務を行っている。

地図に既存の枠を超えた価値が求められている現在では、地図・地理情報の可能性を柔軟かつ大胆に追求し、社会における課題解決に寄与すべく、新たなビジネスを目指している。

●一般社団法人 武蔵野コッツウォルズ

豊かな緑が広がる武蔵野エリアの魅力を発信している。三鷹市、調布市、府中市、小金井市がほぼ1点で接する場所を中心点とし、半径約5kmの範囲を目安とし、その魅力を感じながら巡る「森の地図・スタンプラリー」、ウォーキングやジョギング、ポタリング（サイクリング）、自然散策、グルメ散歩などの体験マップを製作、発信している。

(4)協働研究事業の期間

2018年7月22日～2019年2月8日

1. 等高線地図から読み解く・「はけ」、「崖線」とは何か~~~~~

文学作品にもある「はけ」という言葉と「崖線」という言葉の関係について明確にし、本項で扱うべき、対象区域をどう考えるべきかを明らかにするため、本項では、「はけ」、「崖線」を巡る課題を整理し、対象地域として扱うべき区域について、位置づけを行います。

1-1. 「はけ」と「崖線」を巡る課題

- ・現在、一般に「はけ」「崖線」は同義として広く認識・使用されています。

【学識者・辞典等に見る定義】

○芳賀ひらく：「はけ」と「崖線」は異なる＜形成プロセス＞

「はけ」：開析谷／「崖線」：河川の浸食作用による段丘崖

○『地形の辞典』（2017年2月発行、朝倉書店）

→「はけ」「崖線」とも地形学辞典として初出。ほぼ同義。

崖線 scarp line：側方に線状に長く、ほぼ同じ高さで続く崖。段丘崖に
固有名詞（例：国分寺崖線）が与えられる場合がある。
（後略）

はけ hake, cliff：段丘崖のように、ほぼ一定の比高をもつ急崖、横に長く
伸びる崖を表す地方語、関東から東北地方で多く使用。
ママ、畦畔。国分寺崖線が、小説「武蔵野夫人」で「はけ」
と紹介された。

◎小説「武蔵野夫人」に見るように、「はけ」＝「崖線」認識は浸透しつつあるが、芳賀氏の指摘を踏まえると、「崖線」は、地形的な線状につらなる段丘崖である一方、「はけ」は、段丘崖の一部において、湧水・河川の浸食により発生した開析谷となる。

◎本研究では、「はけの学校」などの取組みを通じて、「はけ」という言葉が「崖線」とほぼ、同様に意味を持つ言葉として文学作品において親しまれており、一般市民の理解に近いものであることを踏まえ、「はけ」を「崖線」を同義の言葉として扱うことにします。

なお、「はけ」という言葉を使う上で、地形の形成メカニズムを含む言葉であることを理解しておくことも重要であり、その観点から、地形形成メカニズムを常に意識できるよう、地形図などを活用した啓発のアクションを継続していくことに留意しなくてはなりません。

1-2. 「はけ」「崖線」の学習素材としての可能性・意義の検討

(1) 小学3・4年生：身近な地域の学習にみる「はけ」と「崖線」

1) 調査方法

- ・地域副読本として活用されている、崖線(国分寺・府中崖線)を含む自治体の小学校社会科副読本を対象として、その学習のねらい・視点、教材化の特徴を整理した。

【調査した副読本】

わたしたちの国立（1995）、（2017）
 わたしたちの国分寺（2002）、（2017）
 わたしたちのまち みたか（2003）、（2013）
 わたしたちの調布（1999）
 わたしたちの府中（2014）

2) 調査結果

●副読本に掲載された「崖線」「はけ」とそれに関連する写真枚数

- ・国立市、国分寺市、小金井市に多く、「崖線」「はけ」とそれに関連する写真枚数が掲載されている一方、三鷹市、調布市、府中市には、掲載されている「崖線」「はけ」とそれに関連する写真が少ない。
- ・掲載される写真の種類としては、崖（崖線）および周辺の様子が、どの副読本でも突出して多く、「崖線」「はけ」が、景観資源として意識されていることを伺わせる。

表 1-1 副読本に掲載された「崖線」「はけ」とそれに関連する写真枚数

副読本	発行年	崖(崖線)および周辺の様子	崖(高低差)	坂道	湧水地	土地利用	川(野川)	諸施設(神社・公園他)	ハケ沿いの道
わたしたちの国立	1995	10	6	1	2	6		1	
わたしたちの国立	2017	10	3	2	2	5		1	
わたしたちの国分寺	2002	13	1	3	5	1	1	3	1
わたしたちの国分寺	2017	14	1	3	5	1	1	3	2
わたしたちの小金井	1999	8	2		2	1	1	2	3
わたしたちの小金井	2015	12	3	2	1	2	3	6	1
わたしたちのまち みたか	2003	2	2				2		
わたしたちのまち みたか	2013	1	1				1		
わたしたちの調布	1999	0	0						
わたしたちの府中	2014	3	2	1		2			
				12	17	18	9	16	7

●副読本に掲載された崖線・はけに関する地図・断面図

- ・国立市、国分寺市、小金井市に多く、「崖線」「はけ」とそれに関する地形・断面図が多く掲載されている一方、三鷹市、調布市、府中市では、掲載されている「崖線」「はけ」の地図・断面図が少ない。
- ・国立市、国分寺市、小金井市の最新の副読本では、いずれも崖線の断面図を示し、地形の特徴を解説されている。

表 1-2 副読本に掲載された崖線・はけに関する地図・断面図

副読本	発行年	崖線の地図（局地的）	崖線を示した地図（市域全体）	崖線の広域図	崖線の断面図
わたしたちの国立	1995	○（イラスト） 「はけ」	×	×	○イラスト 「はけ上」「はけ下」、湧水、土地利用、高低差、標高
わたしたちの国立	2017	○（イラスト） 「はけ」	○「田畑の多いところ」、土地利用	×	○イラスト 「ママ下湧水」、土地利用、高低差、標高
わたしたちの国分寺	2002	×	○（イラスト） 「はけ」 ○全図（附図）	×	×
わたしたちの国分寺	2017	×	○（イラスト）「国分寺のハケ」、坂、野川 ○（イラスト） ○全図（附図）	×	○模式図 「立川段丘」「武蔵野礫層」「立川礫層」「連光寺（互層）」「国分寺崖線」「恋ヶ窪谷」「立川ローム」「連光寺互層（海成層）」「野川」
わたしたちの小金井	1999	○（イラスト） 「はけの森」 「はけの道」 「わき水」	○（イラスト） 「はけ」	×	○（イラスト） 「はけの高さ」「地下水」「わき水」「小金井神社」「野川」「一小」
わたしたちの小金井	2015	○（イラスト） ○高低図 「野川」	○「はけの道」「野川」 高低差	×	○（イラスト）「雨水のしみこみ」「はけ」「池」「地下水の流れ」「野川」、植生、土壌
わたしたちのまち みたか	2003	×	×	×	×
わたしたちのまち みたか	2013	×	×	×	×
わたしたちの調布	1999	×	×	×	（崖線としての記載なし。高低差と土地利用の図あり）
わたしたちの府中	2014	×	○土地利用の図 「ハケ」、土地利用 ○高低図	×	○土地利用（田んぼ、果樹、畑、果樹）、がけ

(2) 「はけ」「崖線」の学習素材としての可能性・意義の検討

以上を踏まえ、「はけ」「崖線」の学習素材としての可能性・意義については、以下のように考えます。

【「はけ」「崖線」が体现する学習素材として可能性】

- ① 歴史的つながり：地域や場所の履歴、生活文化
- ② 自然・空間的つながり：行政界をこえた連続性、環境保全
- ③ 構造的つながり：極めて多様な諸要素の連関・関係性
- ④ 社会的つながり：コミュニケーション、経験・記憶・感覚の共有



【「はけ」「崖線」を学習素材として活用する意義】

「関係性」

- ・地域・場所に根ざしたローカル・アイデンティティの再認識
- ・「地域社会や自然環境の持続可能性」を理解・探究する素材

⇒ 「はけ」「国分寺崖線」共通副読本づくり

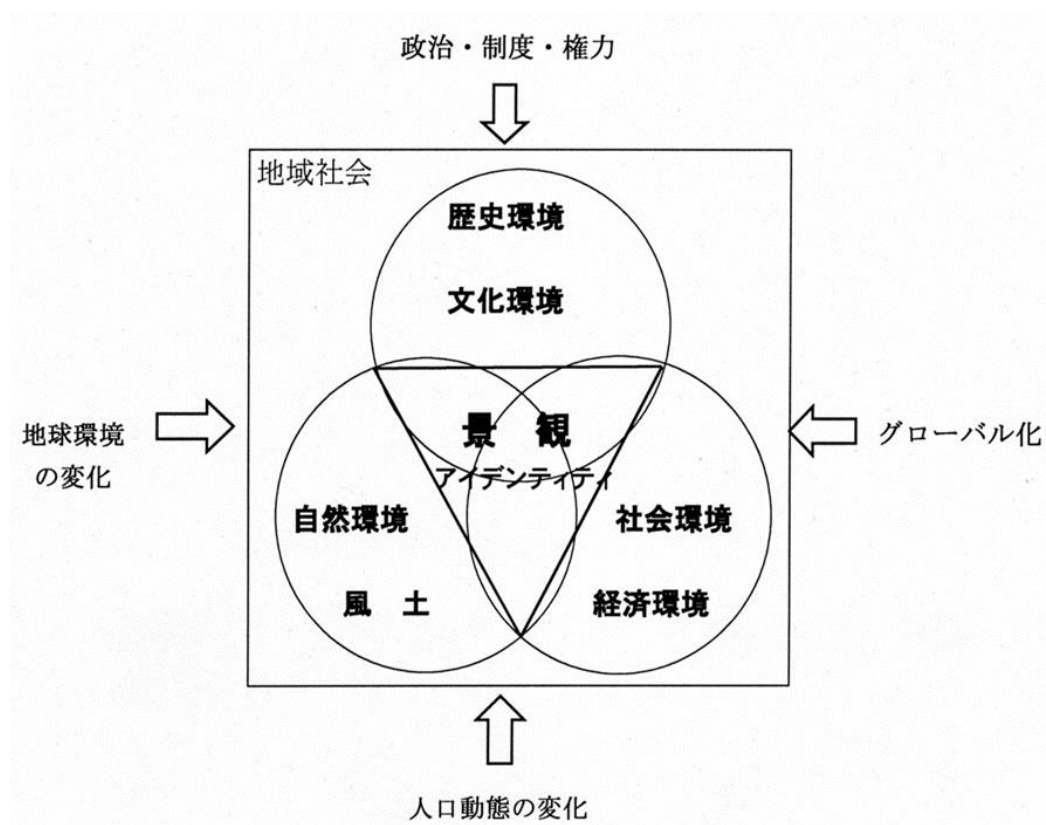


図 1-1 「景観」の概念

1-3.本研究における対象区域の設定

(1) 本研究における対象区域

武蔵野地域を代表する「はけ」「崖線」である、国分寺崖線を本検討の対象区域とします。

また、国分寺崖線の拡がりについては、副読本の検討で明らかになったように、その価値のコアに、「景観」があるため、原則的に国分寺崖線景観基本軸区域(東京都都市整備局)を対象とする。

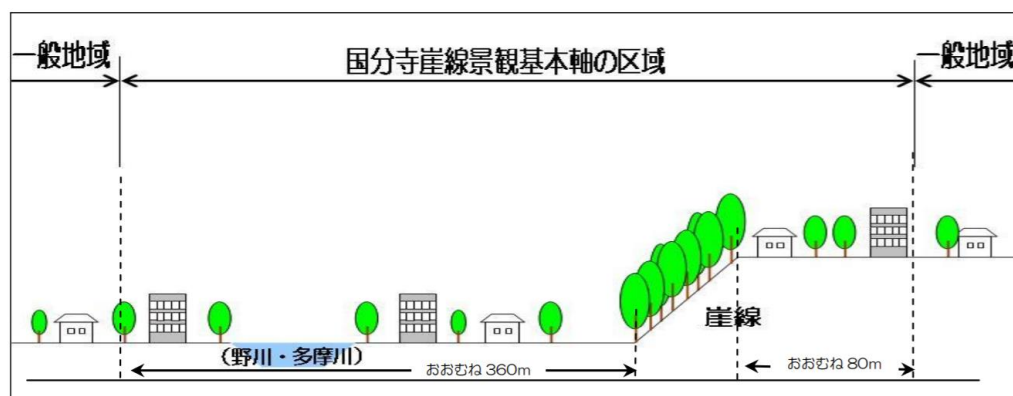


図 1-2 国分寺崖線景観基本軸と一般地域の関係

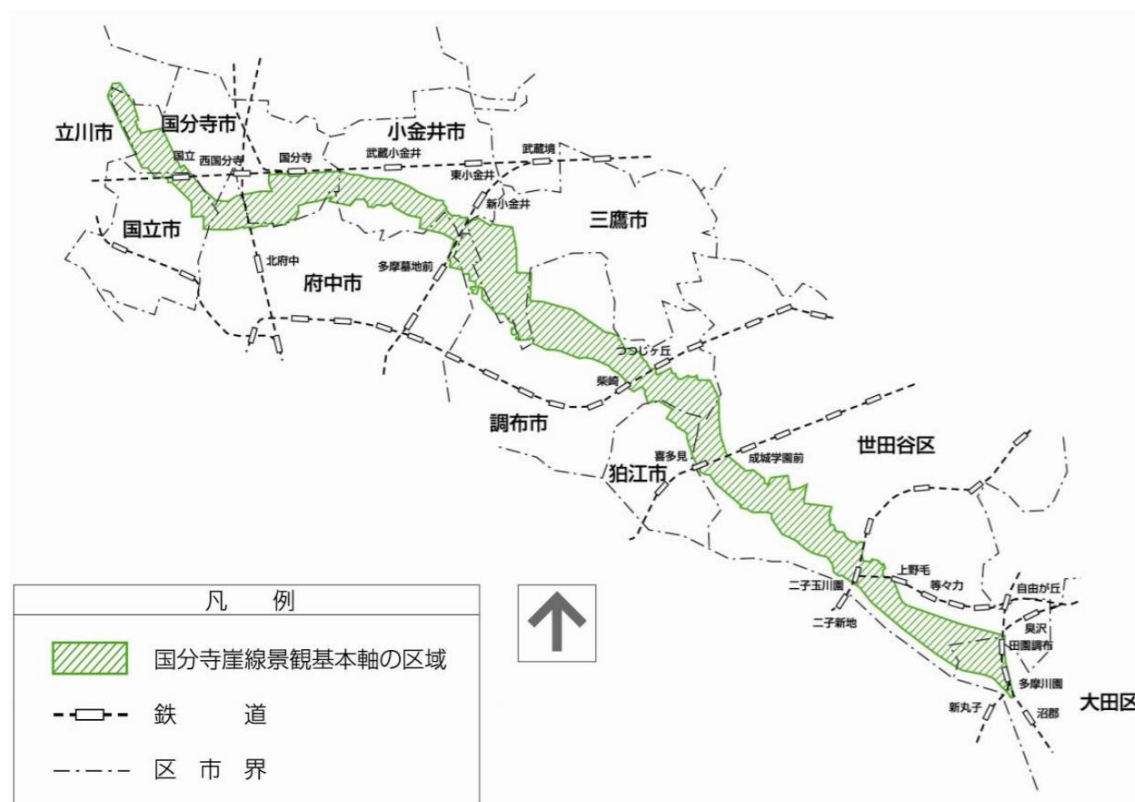


図 1-3 本検討の対象区域

(2) 本年度事業で検討を行う区域

本プロジェクトは、今年を含め、4年間の中期プロジェクトとして展開することを目指しており、本年度は、「国分寺崖線」 全域ではなく、三鷹市から国分寺市にかけての「はけ」に係る研究調査を実施する。

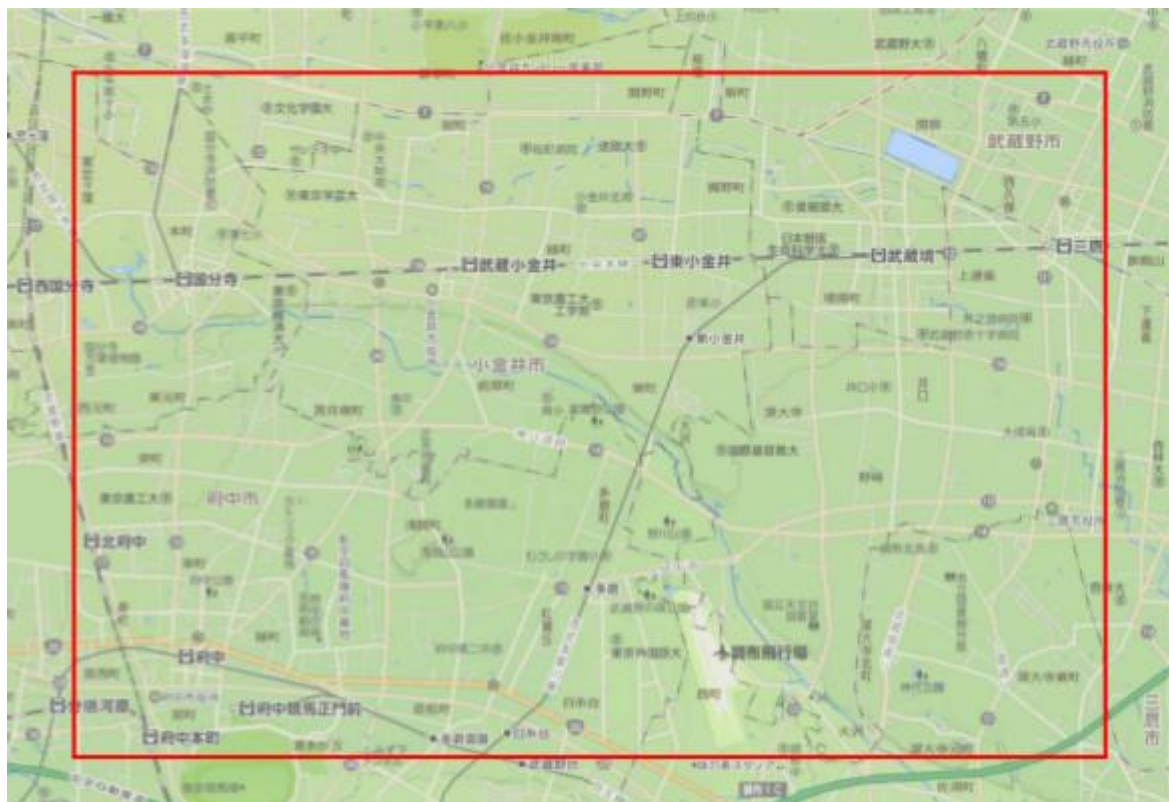


図 1-4 本年度事業の検討区域図

2. インタビューを通じた、百年の武蔵野の体験発掘〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

2-1.インタビューの目的と実施方法

(1) 目的

インタビューは、百年の武蔵野の体験を発掘するという観点から、インタビュー対象者のライフヒストリーと、「はけ」「崖線」の関係を読み解くことを目的に、高度成長期以前から、「はけ」「崖線」にゆかりにある方へのインタビューを実施しました。

(2) インタビュー対象者設定の基本的考え方

今年度は、三鷹市から国分寺市にかけての「はけ」に係る有識者や地域の歴史の証人へのインタビューを実施することとしました。

インタビュー対象者については、以下の3類型を想定します。ただし、今年度は100年の武蔵野の体験を発掘するという観点から、タイプ1のインタビューを先行させることとしました。

- タイプ1：武蔵野地域都市化以前の定住者をルーツとする方々
- タイプ2：高度成長期(昭和30年代、40年代)に定住した方々
- タイプ3：昭和50年代以降の定住した方々
(ミレニアム世代を含む)

(3) インタビュー項目

●ヒアリング項目1

国分寺崖線（はけ）の自然や歴史に関する言い伝えや伝承

●ヒアリング項目2

国分寺崖線（はけ）の文物（建物、遺跡、碑、道祖神、寺社、公園、樹木など）に関する思い出

●ヒアリング項目3

国分寺崖線（はけ）のこれからの関する意見その他
(追加ヒアリング候補者や、情新たな情報提供など)

はけ(国分寺崖線)の歴史と記憶を知るヒアリングFT

- ・ヒアリング結果をまとめるために、以下のヒアリング要点を整理することとする。
- ・以下のフォーマットにヒアリング要旨を記入し、ヒアリング結果を共有する。
- ・要約は、原則としてA4：2枚。フォントサイズは、10ポ～12ポ
- ・資料をいただいた場合は、これをスキャンして、本ファイルデータに添付する。
スキャンデータ名は、氏名ファイル表題とする。

ヒアリング対象者名 (所属)	
ヒアリング日時	
ヒアリング場所	
ヒアリング担当者名	
入手資料リスト	
ヒアリング項目1 国分寺崖線(ハケ)の自然や歴史に関する言い伝えや伝承	
ヒアリング項目2 国分寺崖線(ハケ)の文物(建物、遺跡、碑、道祖神、寺社、公園、樹木など)に関する思い出	

ヒアリング項目3 国分寺崖線(ハケ)のこれからに関する意見	
その他 (追加ヒアリング候補者や、情新たな情報提供など)	
ヒアリング写真 *写真撮影の了解をとる	

2-2.インタビューの実施状況

インタビューは、2018年8月26日から2019年2月4日まで、9人に対して、実施しました。

当初、10人へのインタビューを目指しましたが、対象者の代替わりもあり、最終的に9人に対して、インタビューを実施することとなりました。

インタビューの実施状況は下記の通りです。

表 2-1 「はけ」「崖線」インタビュー実施状況

	インタビュー 対象者 (敬称略)	所属等	日時	場所	取材担当者	備考
1	若竹綾子	元小金井市議 会議員	2018年8月26日	風の庵	鈴木佳子、 野口由紀子	
2	中村秀雄	2018年緑のリ ノベーション・プログラ ムモデル農家	2019年8月31日 ～9月8日（3回）	国分寺市役所内 会議室、JAむさ し国分寺店、中 村家農地等	野口由紀子	
3	榛澤義夫	蛭の里・三鷹 村村長	2018年10月17日	大沢ふるさとセ ンター	野口由紀子、大内 善博、安田桂子	同席：藤橋多 一郎、ナビ： 伊東光則（三 鷹市議会議員）
4	中桐正夫	自然科学研究 機構国立天文 台情報セン ター特別客員	2018年11月13日	国立天文台	土肥英生、鈴木佳 子	
5	本多俊一	本多農園	2018年12月4日	本多農園	鈴木佳子、野口由 紀子	
6	富永一矢		2019年1月8日	富永邸（小金井 市中町）	安田桂子	
7	林徹	考古学者 国際基督教大 学講師	2019年1月18日	国際基督教大学 考古学研究室	野口由紀子、安田 桂子	
8	前田剛、 前田多實子		2019年1月31日	前田邸（小金井 市貫井南町）	野口由紀子、井上 茂、横田右近	
9	荒畑ふみお、 隆		2019年2月4日	荒畑邸（小金井 市貫井北町）	椿先生、野口由紀 子、横田右近	

<参考資料：インタビュー実施しなかった、インタビュー対象者について>

1：谷口家（小金井市）

谷口氏は、茶道家として知られており、初釜の茶席は有名だった。はけの道に現存する代表的な旧家であるものの、台風の影響で被害があり、お話を伺うことができなかった。

2：村越家（小金井市）

小金井を代表する植木農家、戦時中、当主は近衛兵だったという。

武蔵野の植木業は江戸時代の庭師等が由来。小金井は栗を献上していた。小金井周辺は東京の安行とたとえられたほどで、現在も苗木農家は健在。しかし新築に植木を植栽することはどんどん衰退。代わりに白石詰めやコンクリート敷きが多くなって、野菜栽培に切り替える農家も。野菜作りでは江戸東京野菜のブランド化の先進市だったが、現在は立ち遅れつつある。

村越家は新田開発の当時のおもかげをまだ残し、学芸大裏から行幸通りまでを母屋敷地にして当時の盛業ぶりを垣間見ることができる。学芸大地理学巡検では敷地周辺をエリアにし授業展開している。

先代は組合長とし広報活動には熱心だったが、すでに他界。息子さんが継いでいる。はけについては、前田家がよく知っていると、今回は取材を遠慮された。

2-3.インタビュー結果

はけ (国分寺崖線) の歴史と記憶を知るヒアリング FT

ヒアリング対象者名 (所属)	若竹 稜子 大学職員／オックスフォード大学 1967 年生まれ 当時の活動団体：エコロジカル野川（野川流域市民団体）
ヒアリング日時	2018 年 8 月 26 日
ヒアリング場所	わんぱく夏まつり会場／くじら山／風の庵
ヒアリング担当者名	野口、鈴木
入手資料リスト	「私たちの野川」（井戸端議会小金井） 「野川さんぽ地図」（TAMA らいふ 21 協会発行 1993 年初版）
ヒアリング項目 1 国分寺崖線(はけ)の自然や歴史に関する言い伝えや伝承	はけがわたしの産土で、はけがわたしを育ててくれました。父母が新居として求めたのがはけのここ。そしてわたしたち兄弟が生まれました。 89 年からエコロジカル野川実行委員会の委員長をやったり。高校生ときから、わんぱく夏まつりとか、原っぱが日常でした。野口さんにはその頃よく取材された。 「くじら山」が、わたしたちの原っぱ運動の活動のシンボルですが、この山は、母校（南小）の校舎建設の時に出た土の山で、原っぱを海に例えるとなんだかクジラみたいってことで。クジラが汐をふく絵といっしょにみんなに愛されて、和菓子やさんのデザインにもなって活動を盛りたててくれました。

ヒアリング項目2 国分寺崖線(ハケ)の文物(物、遺跡、碑、道祖神、寺社、公園、樹木など)に関する思い出	原っぱの運動は、第三調節池計画ストップまで、6年～8年くらいの関わりだったと思います。 こうしてふりかえると、ハケはわたしにとって自然そのもので、そこに杭が打たれることにナゼ?の疑問が発生して、それはわたしだけではなかった。みんなの疑問は専門家たちにとってもそうだった。 そうした活動から市議になった。初当選は93年3月です。今は英国在住ですが、やっぱり、この、わんぱく夏まつりには来る。子どもたちも一緒に。ふるさとです。
ヒアリング項目3 国分寺崖線(ハケ)のこれからに関する意見	エコロジカル野川がなかったら今頃くじら山下原っぱはなかっただろうな。あの時期の水郷水都全国会議を含む水辺と市民の運動がなかったら、河川法改正もなかった。時代の一つのうねり、というのかな。反対って声を上げるのではなくて、どうして?って、みんながそれぞれでできることで調べた。やっぱり身近な川が汚れていくのは誰でもイヤだし、きれいな流れはうれしい。 モニタリングって続けると実証になる。それは専門家の論が後ろ盾になったり、その手ごたえ。守るってそういうことだとおもう。 野川の三面張り工事が止まって、護岸に緑の土手が復原したときは、万歳! わんぱく夏祭りや、秋のはらっぱ祭りは、40年以上もつづいている市民の実行委員会方式のお祭りで自前。世代がつながっている。
その他 (追加ヒアリング候補者や、新たな情報提供など)	

ヒアリング写真

*写真撮影の了解を
とる



ヒアリング対象者名 (所属)	中村 秀雄 「2018 年みどりのリノベーション」プログラムモデル農家
ヒアリング日時	2018 年 8 月 31 日～9 月 8 日まで計 3 回
ヒアリング場所	国分寺市役所内書庫等会議室／JA 東京むさし国分寺支店 2 階ホール他中村家農地他隣接 X 山等の現地
ヒアリング担当者名	野口由紀子
入手資料リスト	「みどりのリノベーション」講座全 3 回
ヒアリング項目 1 国分寺崖線(はけ)の自然や歴史に関する言い伝えや伝承	時代の転換期に何をするか？農地生産緑地法にかかわる保全手法は準備されている。 公園整備は進んでいる。民有地の緑を増やす流れをつくっていく仕組みづくりの一環としての「みどりのリノベーション」講座のモデル農家 ・中村家は江戸時代の新田開発から 300 年続く農家の分家。 ・中村秀雄さんは農業は継がず公務員となってまちづくり部部長を最後に 57 歳で早期退職し、父の農業に携わる。
ヒアリング項目 2 国分寺崖線(はけ)の文物(建物、遺跡、碑、道祖神、寺社、公園、樹木など)に関する思い出	・ここに来て、公共事業用地とし買収された中村家の農地が都道(新府中街道)とし変わっていくなか、変わらないかつての母屋や屋敷林を眺めた時なんとかこれを残す方法はないものか、と考えるようになった。 ・農業集落風景の保全について世間の捉え方も変わってきている。 ・都道が農地を貫通しつつあることも含め、周辺環境的にも農地を残す意義的条件は整っているのでは、と分析してみている。そんななかで、昨年のみどりのリノベーション講座に参加。 ・そこで、モデルとしてみていただきたい。と考えた。 ・国分寺市では市ぐるみの「こくベジ」ブランドの取り組みの先行例があり、このプロジェクトに中村家本家が関わっている。

ヒアリング項目3 国分寺崖線(はけ)のこれからに関する意見	・中村さんは行政の立場で世田谷、国分寺と順次実践した「崖線フォーラム」に関わった。はけについては農家である当事者としてもよく理解しているつもりであるので、はけの農家がつながることができたらが理想。 (中村家敷地は内藤神社に隣接)
ヒアリング写真	

ヒアリング対象者名 (所属)	榛澤義夫さん（蛭の里・三鷹村村長） 同席：藤橋多一郎、ナビ：伊東光則（三鷹市議会議員）、河村孝（元三鷹市副市長・紹介）
ヒアリング日時	2018 年 10 月 17 日
ヒアリング場所	大沢ふるさとセンター
ヒアリング担当者名	野口由紀子、大内善博、安田桂子
ヒアリング項目1 国分寺崖線(はけ)の自然や歴史に関する言い伝えや伝承	・もともと代々住まわれている方が「ほたるの里」の発起人。それに新しい方がだんだん賛同。30 周年になった。 ・議員の榛澤シゲカズが大沢は環境のいい場所だったので、戦後、野川がどぶ川になった際、七中の子どもさんたちと始めた。ホテルが出たのが昭和 50 年代後半。自分たちのふるさとの自然を守ろうと 63 年に集まってこの村が発足。 ・田んぼは地主の箕輪さんと宮川さんのものだった。年をとって農業をやれないから業者に土地を売ってしまうかと相談があった際、この環境を残した方がいいから行政に買ってもらったらどうかという話になった。たまたま小学校の 5 年生の教育課程に稲づくりがあったのを思い出して、稲作りの体験をと話したら、いいだろうということになった。 ・翌年平成 5 年に多摩ライフ 21 に、三鷹に年間通しての催しがないからやってくれと言われてやった。翌 6 年から市の方でやっていただけるということに。7 年に安田市長に買ってもらった。 ・三鷹は緑と水の公園都市というのを基本構想にしているが、きっかけは大沢から。 ・昔は大沢は豊かな農村という感じ。調布飛行場ができて変わってきた。昭和 12～3 年頃から買収を始めた。軍ではなく東京府が。私のところも畑などたくさんあったが全部とられた。宅地まで。だんだん工場や飛行場にとられていった。 ・大沢には水車は 6 か所くらい。下から、まんじぐるま、えびさわ、はやさわぐるま、しんぐるま、おおぐるま、それから個人の水車がひとつ。ということは田んぼがあって米や畑からとれる麦がたくさんあったんだと思う。

ヒアリング項目2 国分寺崖線(はけ)の文物(建物、遺跡、碑、道祖神、寺社、公園、樹木など)に関する思い出	・こいのぼりは上げなくなっていたので、使っていないのをいただいたらけっこう集まった。最初上げたら風にみんな飛ばされた。「こいのぼりの開き」になってしまった。ビニールの壊れないものを買うようになった。 ・蛍祭りをやったら人が大勢来た。9時終わりだけど終わらない。交通の便がよくないのでバスに乗り遅れる人がいたり、田んぼに落ちた人もいる。それで期間を決めて、1週間、どうぞ自由に見てくださいという形になった。千葉で養殖をやっているところから譲っていただいた。それより先にいたけど、数が少なかった。5年くらい前からは自生のホタルだけになった。 ・大沢は農家100軒あった。今は70から80軒。10代くらい続いているうちがほとんどらしい。 ・わさびは手車で江戸に運んで、帰りは新宿で遊んできたという話を聞いた。 ・わさびは手間がかかる。石を洗わないといけない。水も豊かじゃないと。今は実は深井戸から汲んでいる。それはわさび田というより、どちらかという水田のために。 ・崖線から水はどこでも出ていた。大沢は名前の通り湧水は多かった。 ・子どもの頃は湧水は多かったけど、宅地化やアスファルトの道路、下水に水が流れて湧水がなくなった。野川は今けっこう水があるのが、まえは全然なかったし「どぶ」だった。ゆすり蚊が多かった。 ・子どもの頃は野川で水遊びをした。うなぎをとっていた。獲れる魚はみんな食べられた。だんだん水が汚れた。特に上流に碎石工場か何かができて、それを洗う水が真っ白の時期があった。国分寺の方の電車庫の排水とか。 ・水争いはなかった。水が豊かだった。
ヒアリング項目3 国分寺崖線(はけ)のこれからに関する意見	皆、年を取っているから。農家の暦にあわせた催事をするのが大変になってきているけれども。

その他 (追加ヒアリング候補者や、新たな情報提供など)	■「TAMA らいふ 21」当時担当者に取材 よくいわれた三多摩格差の是正もあって、多摩が、神奈川県から東京府に移管された節目に当たる 1993 年に、都下 365 万人（都人口の 3 分の 1）、都面積 2 分の 1 を占める多摩について、全東京における認識と多彩な分野にわたる多摩らしさの祭典が各地で開催された。 主に自治体にまたがる問題についてがテーマだった。三鷹では農業、大沢がその遺産となった。水辺の復権や 365 万人都市のリサイクル、藤野の芸術村や多摩の自治等々、当時出向で当たった各自治体職員や地域にとって大きな影響となった。野川自然遊歩道などの整備も取り組まれた。 三鷹市では、三鷹型ミュージアム構想があり、大沢の里とし位置づけられている。東京都有形文化財となる水車経営農家やわさび栽培農家の復元など、野川兩岸の江戸時代の農家の暮らしが体験できる。
ヒアリング写真	 

ヒアリング対象者名 (所属)	中桐正夫さん (自然科学研究機構国立天文台情報センター特別客員研究員)
ヒアリング日時	2018 年 11 月 13 日
ヒアリング場所	国立天文台
ヒアリング担当者名	土肥英生、鈴木佳子
入手資料リスト	
ヒアリング項目1 国分寺崖線(はけ)の自然や歴史に関する言い伝えや伝承	・国立天文台の官舎でもかなり最近まで井戸を掘って、井戸水で敷地内にある 50 軒くらいの水を賄っていた。 ・今でこそ、「武蔵野の面影を残した森が広がる」などと言われるが、ここに天文台が来た時は一面の畑のなかにぽこっとドームがあるような風景だった。当時プラタナス、サクラ、ポプラ並木なども整備された様子があるが、観測のじゃまになるので切ってしまうなど、敷地内の整備はおざなりで、いまある森は、鳥が運んできた種などから自然に生えてきたものの。 ・中桐さん自身は昭和 41 年に働き始めた。その頃は周りの農家が敷地内に耕作に入っていた。農地を買い上げられた人が耕作していたようだ。 ・国分寺崖線のそばにあるアインシュタイン塔は分光器を使うのだが、分光器は温度変化を嫌うため、地下室に置いた。その地下室にははけの崖地から土管を通して通風口を作り、野川からの冷気を取り込む自然の空調システムになってる。その土管をタヌキが通り道としてつかっている。アインシュタイン塔の望遠鏡は使わなくなって 50 年たちますが、いまでもタヌキはいる。 ・コジュケイ、キジ、オナガなどの野鳥もいたが、野良犬、野良ネコが多いので食べられたりしている。野良犬は保健所によっていなくなったが、いまでも野良猫は多い。ハクビシンやアライグマがいるという人がいるが、自分を見たことはない。ハクビシンは死骸が見つかったことはある。

ヒアリング項目2 国分寺崖線(はけ)の文物(建物、遺跡、碑、道祖神、寺社、公園、樹木など)に関する思い出	・研究棟などを建築する際に発掘調査を何度かしている。天文台構内古墳は昭和 45～46 年と平成 16～21 にかけて調査をした結果、7 世紀後半のもので全国的にも稀な上円下方墳と呼ばれる特異な形と判明し、平成 17 年度に国史跡に指定された府中市の武蔵府中熊野神社古墳につぐ 4 例目となった。 ・その他石器時代～縄文時代、石器時代の鍬などはいっぱい出てきたようだ。 ・中桐さん自身、20 年前は 48 軒あった官舎の一つに、家族と住んでいた。うめ、柿、栗、びわなどの木を植えてそれを子供たちがとって食べていた。タケノコ、ツクシ、ヨモギなども採れた。夏にはカブトムシをとったり、池をつくって亀を飼ったりした。現在でも天文台の職員で野鳥観察などを行っている。大正期の 1 号官舎を星と森と絵本の家に整備する事業にも携わる。 ・バス通りの向こう側は大沢という土地で深い谷があって、ワサビ田があった。大沢台小学校のところは深い谷だった。それを昭和 40 年代に埋め立てた、天文台裏門のすぐ向こうのみのわさんというお宅は軒下まで水に埋まった。長久寺も谷にあったが曳家で今の場所に移動した。谷があるから曳家をするのに石臼などで埋め立てたらしい。
ヒアリング項目3 国分寺崖線(はけ)のこれからに関する意見	・国立天文台構内には、現役を退いた望遠鏡や観測塔が多数あり、復元整備やアーカイブすることによって、研究遺産として大切にのこしていきたい。→日経サイエンス「日本天文遺産」という連載をしている。現在 19 回。 ・三鷹ネットワーク大学と、天文情報センター普及室・縣秀彦教授が担当し、協働で太陽系ウォークなどのイベントも開催している。

その他 (追加ヒアリング候補者や、新たな情報提供など)	・天文台とはもともと星の位置を調べて地図や暦を作る働きをしていた場所。いずれも役割を終え竹やぶや地中に埋没していたが、過去の資料や写真を丹念に調べて発掘し案内できるように整備した。 ・文部省測地学委員会が1915（大正4）年に設置した「菱形基線（りょうけいきせん）」＝当時大陸移動説を唱えた物理学者・寺田寅彦が地殻変動調査のために設置した菱形基線は、1辺100メートルの菱形の端にピラミッド型の覆いをした「基準標識」を埋めたもので、数年に一度地殻変動の測定を行っている。関東大震災で地殻変動が測定された研究報告もある。この基線を測定した「基線尺比較室の跡」も整備されている。 ・1923（大正12）年に設置した「三鷹国際報時所」に関連する史跡4カ所＝三鷹国際報時所は国際的な報時信号を受信し日本の時刻を保持していた機関で、現在の三鷹キャンパスの北西にあった。1948（昭和23）年に測地学委員会から東京天文台に移管されると、1970年代に建物が取り壊され門柱だけが残った。ツアーガイドではこの研究所のあった場所と、報時信号を受信した高い60メートル鉄塔の跡地3点を案内する。同鉄塔は1943（昭和18）年に調布飛行場から飛び立った軍用機が接触し、墜落炎上する事故があった。その後、1945（昭和20）年4月、同飛行場東側の高台に設置された高射砲の発射に邪魔だとして鉄塔は撤去された。1924（大正14）年に設置した一等三角点「三鷹村」＝「三鷹村」と書かれた一等三角点は、関東大震災で日本の測地学上の経緯度原点（港区飯倉の東京天文台内にあった）が失われることを心配した参謀本部陸地測量部（国土地理院の前身）が三鷹に移転した東京天文台構内に設置したもの。平地にある一等三角点は珍しく、当時は高いやぐらが立っていたが、現在は標石とそれを囲む石が残る。（2012年4月23日調布経済新聞webページの記事より）
--	---

ヒアリング写真



ヒアリング対象者名 (所属)	本多俊一 (本多農園)
ヒアリング日時	18年12月4日
ヒアリング場所	本多農園直売所奥の庭で焚き火を囲み、本多さんはほうれん草の出荷作業をしながら取材
ヒアリング担当者名	鈴木佳子、野口由紀子
入手資料リスト	本多俊一（本多農園）
ヒアリング項目1 国分寺崖線(はけ)の自然や歴史に関する言い伝えや伝承	・昔からこの家では、井戸は作ったことがない。湧き水で賄っていた。池は裏手にある。井戸はこの辺はみんな作ったことない。近代になってから作っているうちはあるけど、その前の時代は、井戸掘る技術も大変だったから。水道ができた時は水道は引いた。下水道ができて、それからはどんどん良くなった。 ・今は畑ばかりだが、田んぼもやっていた。でも田んぼは、ちょうど畑も忙しいときなので大変。この辺の田んぼはドブ田って言って深くてぬかる。野川が暴れたんだと思うよ。だから深いんだよな。それで肥料が多いかというところでもない。水っけが多いから、すごくいい米が取れるわけでもない。高度成長期になると下水が田んぼに入って、稲がみんなバカになっちゃう。実が入らずスカスカになる。下水がみんな田んぼに流れ込んでしまうので、石けん水がすごかった。それでお米が臭くなる。売れないし食えない。それで、昭和36年くらいに田んぼはやめた。今みたいに機械を使うわけじゃなく、種まいてから一本一本植えて、それから手で刈って。88回手をかけるから「米」って書くんだから。だから畑より先に田んぼがなくなった。田んぼだったところの方が割と早くいろんなものができた。柚木のあたりなんかもそう。一気に宅地なんかになった。 ・お寺さんは府中。府中の方まで田んぼだった。 ・江戸時代なんかははけの雑木林でみんな炭を作ったらしい。 ・庭に樹齢200年以上の大きな金木犀があって、俊一さんは子供の頃よくてっぺんまで登って、怒られた。でも怒られる

	たんびに登って、親が自分を探してるのを上からよく眺めたよ。 ・はけは崩れたことはない。 ・昔はお蚕も飼っていた。 ・竹は住んでいると大丈夫。空き家になると生えてくる。
ヒアリング項目2 国分寺崖線(はけ)の文物(建物、遺跡、碑、道祖神、寺社、公園、樹木など)に関する思い出	・本多家は、延宝6年(1678年)に初めてこのあたりの検地があった。その時には記載されていた。その前からあったかもしれない。この辺は水があったから国分寺ができた。えらい坊さんだって、水がなきゃダメだ。昔の人は口伝えに聞いて、ここにしたんだろうと思う。多摩川が近くて、崖があって水が湧いていて、武蔵路に近かった。 ・母屋は茅葺き屋根にカバーをしている。昭和36年ごろ、カヤを物置に積んであったんだが、物置に火をつけられたことがあった。それで、茅がなくなっちゃったので、それでカバーをかけた。それ以来、葺き替えてない。昔は茅葺きを、地域の人みんなでやっていたが、職人もいなくなってしまったのでできない。ただ壊すのは簡単だけど、作るのは大変だから、残しておいたら何かの役に立つだろうと思っている。 ・東経大のワサビ田も本多家のものだった。 ・本多町は坂の上にあるのが新田で、こっちが親村。昔は全部繋がっていた。 ・はけの上はみんな雑木林だった。ただこの辺りは下から吹き上げてくる風が冷たいので、国分寺駅の北側にみんな分家に出した。この辺りは寒い。 ・空襲の記憶はある。この家すれすれにB29がきた。中央線を目印にくる。日立めがけて本多のあたりに落とされた。中島飛行機が一番やられた。戦争も、もう少しもう少しと思って頑張った。そういう教育だった。 ・カメラマン井上さん参加。(井上さんの実家は井上園というお茶屋さん。本多家のお茶も扱っていた)この辺の農家さんは、畑の垣根にお茶を植えていたり、お茶畑も持っていた。それを収穫すると、小金井の井上茶園に持って行ってお茶にしてもらおう。お茶がめというのがあった。8月火入れをした。井上園のおじいちゃんは何んでも屋というか作業員のよう

	な人で、需要と供給があって、井上園は運送業もやっていた。清水牛乳というのが旧青梅街道五日市あたりにあって、近くの小学校に毎日配達していた。清水牛乳も大きかった。新田開発の前からあるうちだから横にも広がった。 需要と供給という意味では、この辺りは農家も大きいので、その庭木を整えるのに、植木屋さんが増えた。瓦屋さんなんかも多くて職人を出した。四谷の大名屋敷なんかにもこの辺りから職人が行ったらしい。日野のあたりでも多摩川で朝鮎をとって、新宿に持っていくと鮎を売る店があってもものすごいお金になったらしい。そもそも、このあたりは御鷹場で幕府の土地。その頃から本多の家はあった。その頃のことはわからないが、お鷹狩りは三鷹のあたりまででこの辺は、一泊しないと江戸まで帰れないので、そんなには来ていないのではないかと思う。ただ、何かあると、宿泊所にしたり、おもてなしをしたりしていたのだと思う。
ヒアリング項目3 国分寺崖線(はけ)のこれからに関する意見	・崖線の裏山はかつては手入れしてた。綺麗にして下草集めて肥料にしたりした。今はどこのうちでもだいたい東京都が相続の時に買っている。伐採なんかは東京都が定期的にはやっている。だから落ち葉を堆肥なんかにするのはうちの周りのだけ使っている。税務署では肥料を買えば経費になるが、落ち葉を使ったんじゃ経費にならない。その仕組みがおかしい。

その他 (追加ヒアリング候補者や、新たな情報提供など)	・本多家はリオンの向こうまで土地はあった、戦前の領地買収で持って行かれた。リオンの前は小林理学研究所といって軍事産業の研究なんかもしてたらしい。太平洋に浮かんでいる敵の戦艦を探知する研究なんかもしてた。その研究を利用して補聴器や魚群探知機などになった。そういう研究が軍の力で飛躍的に進化した。農薬会社もそう。殺虫剤も、毒ガスの研究なんかから発展している。ただ自然で作ったらなんでも虫とか出るんだよ。日本は人や家畜なんかの糞を肥料に使うから、戦後アメリカ軍は野蛮って言って、関東村で水耕栽培をした。※関東村は、代々木にあった米軍施設が東京オリンピックの選手村として使用するため、現在の調布飛行場周辺、警察大、外語大のあたりに移転してきた。米軍施設と米軍関係の住宅（通称：ワシントンハイツ）を総称して関東村と呼んでいた。今頃になって、水耕栽培なんて言ってるけど、昔からあった。
ヒアリング写真	

ヒアリング対象者名	富永一矢
ヒアリング日時	2019 年 1 月 8 日
ヒアリング場所	富永邸（小金井市中町）
ヒアリング担当者名	安田桂子
入手資料リスト	参考資料：「武蔵野夫人」大岡昇平／著
ヒアリング項目 1 国分寺崖線(はけ)の自然や歴史に関する言い伝えや伝承	・「はけ」は固有名詞。現在のはけの森美術館あたりの渡辺さん宅のことを「はけ」「はけんち（はけの家）」と呼んでいた。 ・湧き水をためた池があり、そこで野菜を洗ったりお米を研いだり、おむつを洗ったりしていた。14-15 人集まり、井戸端会議をする社交場だった。 ・大岡昇平の「武蔵野夫人」に記されている『土地の人はなぜそこが「はけ」と呼ばれるかを知らない』は、まさにその通り。小説が有名になって「はけ」という言葉が広まり、「はけの道」と名付けられた。昔はリヤカーが一台やっと通れる幅で、誰も歩いていないような、農家が使う道だった。 ・小金井で田んぼがあったのはここだけ。農家としては特権階級だった。坂上と坂下で格差があり、坂上に嫁に行くことはなかった。府中の商家などへ嫁いだ。結婚を許されないカップルが雑木林で首を吊った。 ・戦前、土地の人と移り住んできた新住民が、お互いに調和してやっていた。諍いは聞いたことがない。商売もできないようなへんぴなところに普通の人には来ない。文化人が多く、田舎の良さがわかっている人が移り住んできた。土地の人はあたたかく受け入れる土壌があった。不思議なところ。ちっとも便利にならなかったことがよかった。のんびりしていた。 ・このあたりはほじくるとやたら土器が出てきた。小学生のとき金属の刃物を発見した。先生に見せたら持って行かれてしまい、その後どうなったか分からない。

ヒアリング項目2 国分寺崖線(はけ)の文物(建物、遺跡、碑、道祖神、寺社、公園、樹木など)に関する思い出	・渡辺さんは農家だったが、道から斜面を上ったところに屋敷があった。農家としては非常にめずらしい。農作物をつんだリヤカーを屋敷に運ぶのが大変だった。そこがほかの農家と違っていた。 ・戦前、「小橋さん」という品の良いおばあさんが、お付きの方と一緒に住んでいた。純日本風の広い平屋のお屋敷で、庭は芝生。湧き水を引いた池があって魚を飼っていた。そこに「魚雷投下」などと言って石を投げて遊んでいた。おじいさんに連れられて遊びにいくと、見たこともないような上品な和菓子をごちそうになった。上流階級の方だったのだろう。下の名前は分らない。 ・ムジナ坂は、タヌキやイタチが通るけもの道。いつその名が付いたのかは分らない。昔はよくタヌキにだまされた。家の軒にぶらさがって、しっぽで戸を「トントン」とたたく。誰か来たと思って「はい！」と急いで行くと誰もいない。母に「また騙されたね」とからかわれた。何度もそんなことがあった。 ・戦中はタヌキやウシガエルも食べた。タヌキ汁は美味しかった。キツネ、ヘビ、ウサギは美味しくない。
ヒアリング項目3 国分寺崖線(はけ)のこれからに関する意見	(「国分寺崖線そして、「はけ」のこれからに関して、どんな思いがありますか？道路計画はどう思いますか」の質問に対して) 今のまま残してほしい。都市計画がきちんと出来ていない。STOP をかけるのは今しかない。
その他 (追加ヒアリング候補者や、新たな情報提供など)	大岡昇平さんの思い出 大岡さんの姿は覚えているが、顔を見たことがない。一日中歩き回り、帰ってきて執筆する、という繰り返しだった。鮮明に記憶しているのは、南側の居室に立ち、じっと富士山を眺めていた後ろ姿。戦地から生還し、学生時代になじんだこの地を再訪した感慨にふけていたのではないか。

ヒアリング写真



ヒアリング対象者名 (所属)	林徹さん (考古学者、国際基督教大学講師)
ヒアリング日時	2019 年 1 月 18 日 (金)
ヒアリング場所	国際基督教大学考古学研究室
ヒアリング担当者名	野口由紀子、安田桂子
入手資料リスト	なし
ヒアリング項目 1 国分寺崖線(はけ)の自然や歴史に関する言い伝えや伝承	・東京のような都市は地形の改変が激しいが、このあたりは非常に古い状態を残している。そういう意味では、縄文人が見ていた景色を自分も見られるので、いいなあというイメージはある。 ・8 年ほど前に小金井市東町に来た。緑が好きなので、はけだけでなく、自然環境がよいので選んだ。当時は家のまわりに樹木や植木畑、草地、空き地がたくさんあったが、あっという間になくなった。すべて住宅になってしまっ残念。 ・土地の歴史や由来については住んでいる人でも知らないことが多い一方で、役所の担当者より市民の方が細かい情報や色んな面白いこと知っていたりもする。ソースは市民にあるのかなと思う。講演を終えたあとに「ここに遺跡がありますよ」なんて、市民が私の知らないことを教えてくれたりもする。そういうアプローチがなければ、専門家でも分からないことが多い。こういうことが非常に大事だ。
ヒアリング項目 2 国分寺崖線(はけ)の文物(建物、遺跡、碑、道祖神、寺社、公園、樹木など)に関する思い出	・縄文人が竪穴住居をつくり村を営んだのは「はけ上」が圧倒的に多いが、「はけ下」も掘ったらたくさん遺跡が出てくる。時代によって上をやめて下に移った場合もある。縄文後期の寒くなった時期は、上の遺跡が減り、下から出てくる。はけの下は暖かい。昔からそうだったんだなとよく分かる。旧石器時代から、はけ下にも生活の痕跡がたくさんある。遺跡は、野川をはさんで両側にある。有名な旧石器時代の野川遺跡は、野川の南側、現在の野川公園の新前橋のあたり。まだまだ見つかっていな遺跡がある。 ・いま「武蔵野樹林」に原稿を書いているところ。今みたいな話をまとめている。編集担当に、はけの地形が分かる撮影ポイントを聞かれたが、考えてみればほとんど開発されて崖

線の見えるところがない。野川公園～武蔵野公園付近にしか残されていない。そういう意味でもここはよいところだ。

・野川沿いは、上流から下流まで本当に遺跡が多い。世界中、川のそばには遺跡があるが、ここだけめっぽう多い。武蔵野台地の中でも、ものすごく多い。なぜだろう、と。暮らしやすい、だけではない魅力があったのだと思う。ひとつには私は景観だと思っている。縄文時代の富士山はいまの富士山と形が違うが、この辺から見えたことは確かだろう。

・景色がどうして大事かというと、当時の人たちにとってカレンダーがすごく大事。お日様がどこから昇ってどこへ沈むのか、星の位置がどうだとか。縄文時代には四季があったので、自然の恵みをいただいている生活の中で、天体の情報はこの時期からこれが採れるというような目安になる。日本全国で縄文人はそういうことをしていたらしい。景観というのはすごく大事な要素。住居を選ぶなら、見晴らしのよいところがよかったのではないか。最近の学会でそんなことが言われている。景色が美しい、気持ちよい、という事もあったと思うが、カレンダーとしての要素も大きかったのでは。神田川、善福寺川とは違い、景観がよいことから、ここに人が集まってきたのかもしれない。

・あとは、今とはくらべられないほど水量が多かったこと。交通の面でも、丸木舟で川を上ったり下ったりできたので、人、モノ、情報が動いていた。魚もたくさんいた。鮭がのぼっていたはず。秋川の近くから縄文の古い時代の遺跡で前田耕地という遺跡から鮭の歯がたくさん出ている。鮭の痕跡は野川流域からは出ていないが、水量がある川だったことから、当然遡上してきていた可能性があると思う。野川は50?60年前までは水量が豊かで、ウナギ、マスなど、色んな魚がいた。繭をゆでるのに大量の水が必要になる製糸業がさかんだったのも、野川の水量が多かったから。鴨下製糸場は、野川から水をポンプで汲み上げていた。開発が進んで水が枯れたので操業をやめたという話を聞いた。

ヒアリング項目3 国分寺崖線(はけ)のこ れからに関する意見	・今やってることが続いていければいい。最近講演を依頼されることが増えた。自分の知っていることは限られているが、それでも大昔の話は一般の方は知らないことも多いので、出来るだけひとりでも多くの方にそれを知らせたい。少しおおげさだが使命というか、それが私に出来ることではないかと思っている。難しい研究云々よりも、そっちのほうかなと。やっているうちにこっちも一生懸命考えるので、また新しい知見が出てきたりもする。学問にもつながっていくので、勉強させてもらっている面もある。これは死ぬまで続くんだろうと思う。 ・これからどうなるか分からないが、なるべく現状のまま維持してほしい。自然が長いスパンで変わっていくのは仕方ないが、人間がいきなりガンガン変えてしまうのはあまりうれしくない。ただし、自然環境に極めて前向きに働きかけた縄文人を見習い、自然が破壊されたら代わりに木を植えたり草花を育てるといったポジティブ・キャンペーンを進める事が大切と思う。
ヒアリング写真	

ヒアリング対象者名 (所属)	前田剛さん、多實子さん
ヒアリング日時	2019 年 1 月 31 日
ヒアリング場所	前田邸（小金井市貫井南町）
ヒアリング担当者名	野口由紀子、井上茂（写真）、横田右近
入手資料リスト	
ヒアリング項目1 国分寺崖線(はけ)の自然や歴史に関する言い伝えや伝承	・剛さん：このあたりは地盤がしっかりしています。そのかわり水が貯められないので米がとれません。水が豊か、水に関わった土地が多いという印象があります。 曾祖父が、大正年間に別荘としてこの家を建てました。当時は何もなかったようです。文献を読むと、坂に面した所に家を建てるのはステータスシンボルだったので、それで祖先は裕福だったのかなと思います、今は見る影もないですが（笑）。非常に風光明媚な土地だと感じています。日比谷公園を設計した造園の方が配置をしたそうです。 貫井遺跡の上なので遺跡は多く、雨が降ると土器のかけらがたくさん出ました。2 万年前から人が住んでいたのは、火山以外の自然災害がなく、水害などなく地震が起きても大丈夫という印象です。 子どもの頃は自然を使って遊びました。わき水でヤゴをとったり、ヘビやトカゲをつかまえたり。坂を自転車で駆け降りる度胸試しをしたり。 ・多實子さん：お父さんは大雨が降るといつも、野川とプールを見に行っていました。

ヒアリング項目2 国分寺崖線(はけ)の文物(建物、遺跡、碑、道祖神、寺社、公園、樹木など)に関する思い出	・多實子さん：とりわけ、メオトケヤキが私にとって大事です。悲しいことなどがあると木と話をします。話ができると錯覚しています。 連雀通りまでが敷地でした。火事があり、その後、自然に溶け込めるような形にしました。 貫井遺跡は、四小の子供たちもいっしょに掘ってもらいました。 ・剛さん：元市長の大久保さんと北町の湯浅敬吉さんが同級生だったんです。神社の脇に水車があったんですって、90年前は。二人が元気なうちに四小の子供たちに、その思い出話をやろうねって言っててできずに亡くなられて残念でした。 ・夏にプラスチックの池を作ると、毎年春くらい、貫井神社から同じカメが上がってきました。秋になると帰って行きました。
ヒアリング項目3 国分寺崖線(はけ)のこれからに関する意見	・剛さん：スタンプラリーを僕がやるとしたら大勝軒を入れます。崖に面しているし。前は蕎麦屋だったんです。ヤエスエンっていう。それがつぶれて内装そのままラーメン屋になったので不思議な店なんです。 それと、「何もない」は貴重です。散歩する力、寄り道する力(能動的に何かを見つけようとする力)みたいなものが小金井では鍛えられます。 ・多實子さん：生涯学習課の部長が柔軟な方です。高木さんには、もったいないからルーツを作ってくださいと徐々に話はしています。遺跡のことを彼が立ち上げて、それを含めた形で学校やなんかで、ここがどういう土地なのか、まずは子供たちに残していくように。ひとつ問題は、市役所の人が、小金井市にいる人がだんだんいなくなってますでしょ。それは惜しいですね。

その他 (追加ヒアリング候補者や、新たな情報提供など)	・今だにうちはよそ者なんです。良くも悪くも年季の入ったよそ者。積極的に排除されるわけではなく、敬遠されます。身内になると今度はプライバシーがありません。駅前で遊ぶと、翌日には、お宅のところの息子さんがどこそこにいたよ、と。高校になって区外に行ったときに、前田の息子じゃなくてただの僕しか見られないってなった時に天井が外れたような（解放された）気がしました。 ・弁天様を中心にしてなんとなくみんなが集まっている。前田が新旧のブリッジになりました。これを新しく来た人がやると衝突しますが。
ヒアリング写真	  

ヒアリング対象者名	荒畑ふみおさん、隆さん
ヒアリング日時	2019 年 2 月 4 日
ヒアリング場所	荒畑邸（小金井市貫井北町）
ヒアリング担当者名	野口由紀子、椿先生、横田右近
入手資料リスト	
ヒアリング項目1 国分寺崖線(はけ)の自然や歴史に関する言い伝えや伝承	・生活用水は1キロくらい汲みに行きました。水は貴重でした。飲み水は家の井戸でした。母は関野町から来まして、向こうは用水の水が流れていたもので、嫁に来たての頃は水の使い方が荒いと言われていました。 ・はけを下って行くということは、遠かったのでありません。 ・はけは等々力の方までつながっています。等々力溪谷はけっこう深いです。 ・渡辺ゼンイチさんは「はけはけ」と言っていました。一時議員をしていました。 ・井戸は10m くらいでした。植物が水を吸うので井戸が枯れることもありました。 ・た：はけは急坂なので、坂をリヤカーでのぼるのが大変でした。 ・はけは崖線全体を指していました。くぼみのところは「谷戸」で。ただ、普段は坂上、坂下と言っていたように思います。
ヒアリング項目2 国分寺崖線(はけ)の文物（建物、遺跡、碑、道祖神、寺社、公園、樹木など）に関する思い出	・うちでは松は防風林で植えていました。松は庭には必ず植えるものでした。造園に使われたことが多いです。アカマツとクロマツではクロマツが風に強いです。建築には油が多くてあまり向きません。殿ヶ谷戸庭園などを歩くと、いいところに松が植わっています。カシも防風林に使われました。ケヤキは関東ローム層の赤土に合っているらしいです。用材にはあまりケヤキの伸びのいいのはだめだといいますが、カシやケヤキは硬いし、いろいろ使われていますね。クヌギは平地林です。クヌギやナラやエゴは雑木林として平地に植えます。 ・野川のあたりには小金井でも水田がありました。府中ほどの規模ではないですが。あとは畑。麦だとか。うちでは1/3

	が畑、1/3 が桑畑、残り 1/3 が平地林でした。 ・もともとが持っていた八町歩の畑はおおよそ今の学芸大・陸軍技術研究所になってしまった範囲。全部買収されました。終戦後返すという法律ができましたが、結局一部でした。その頃は売るのは 3 円～高くても 5 円、買ったのが 15 円でした。畑地の方は借りました。父は大変な苦勞をしたと思います。土地を借りてなんとか生きてきたことを忘れるなと言われました。 ・ふ：私は次男なんですが、兄は農地を買収されたりがあって工業関係に行きました。 ・ここはおそらく享保年間に入植しました。1700 年代。玉川上水ができる前です。桧原の方から出てきらしいです。養蚕がうまかったようで、それで財をきずいたと。50 人ほど雇っていました。 ・た：貫井の向こうの方のトンネルは、当時はものすごい怖かったです。山賊や獣でも出そうで。 ・ふ：このへんは米がないからご馳走というとうどんでした。
その他 (追加ヒアリング候補者や、新たな情報提供など)	・ふ：はけの上と下では、付き合いは今ではお祭りくらいのもんです。お寺さんの付き合いがある家とない家がありました。向こう（下）の方が、本家が多く有力者が多かったです。
ヒアリング写真	

3. 三鷹実踏による緑縁プログラムの検討~~~~~

3-1.緑縁プログラムの目的

緑縁プログラムとは、街歩きを通じて、「はけ」「崖線」の魅力・価値を体感することで、「はけ」の緑を媒介とした、新しいネットワークを作る街歩きプログラムである。

本項では、一般社団法人武蔵野コッツウォルズの鈴木俊彦さんの協力・ガイドの下、三鷹市大沢の「はけ」歩きを通じて、地域の魅力をどう発見、発掘するか、また、どうネットワークを形成していくかを検討した。

3-2.三鷹実踏による緑縁プログラム概要

(1) 実施日時

2019年2月8日(金)13時—15時30分

(2) 参加者

ガイド：鈴木俊彦

同行者：大内善宏、鈴木佳子、土肥英生、野口由紀子、前田幸則

(2) 緑縁プログラムの検討の進め方

武蔵野コッツウォルズの鈴木俊彦さんのガイドで、三鷹市大沢を中心に、野川公園一之橋バス停に集合し、以下のルートで、はけ周辺地域を歩きました。

7).調布飛行場展望台休憩室では、周辺の古地図などを参照しつつ、武蔵野コッツウォルズの取組みの説明を受けるとともに、武蔵野コッツウォルズとどのような連携・協力が可能か意見交換を行いました。

1).野川公園一之橋上りバス停集合～野川公園一之橋北口

2).東八街道富士見大橋下のトンネル

3).人見街道に架かる御狩野橋と相曽浦橋

4).大沢の里古民家の裏山にあたる国分寺崖線～出山横穴墓群8号墓（横穴墓と戦時中の防空壕）

5).飛橋～はけ上へ階段の歩道橋（通称：七中階段：100階段）～富士見テラス～

6).工事中の野川大沢調節池

7).調布飛行場展望台

8).武蔵野の森公園～掩体壕大沢1号2号（えんたいごう）



街歩きルートマップ

凡 例

- ①野川公園一之橋上りバス停集合～野川公園一之橋北口
- ②東八街道富士見大橋下のトンネル
- ③人見街道に架かる御狩野橋と相曽浦橋
- ④大沢の里古民家の裏山にあたる国分寺崖線～出山横穴墓群8号墓
- ⑤飛橋～ハケ上へ階段の歩道橋（通称：七中階段：100階段）～富士見テラス～
- ⑥工事中の野川大沢調節池
- ⑦調布飛行場展望台
- ⑧武蔵野の森公園～掩体壕大沢1号2号

図 3-1 緑縁プログラム実踏ルート

3-3.モデル街歩きの実施結果

(1) ガイド役について

一般社団法人武蔵野コッツウォルズの鈴木俊彦さんをガイドに招き、大沢付近の国分寺崖線を散策しました。

武蔵野コッツウォルズは、東京郊外の武蔵野地域が英国ロンドン郊外の人気観光スポット「コッツウォルズ」にも共通する自然豊かな場所と考え、散策やジョギング・サイクリングなどでこの地域をたくさんの人が楽しめるよう推進する活動をされています。

(3) 街歩き記録

1).野川公園一之橋上りバス停集合～野川公園一之橋北口

現在、東八道路（道幅 30 メートル）は歩道と自転車レーンの整備工事中で、2020 年東京オリンピックでは自転車競技の開催地となるらしい。



東八道路自転車競技のための副道

2).東八街道富士見大橋下のトンネル

東八道路と旧道の人見街道交差地点は富士見橋という名前のとおり、富士山がよく見える。このあたりの崖線は富士山の方角である西に向いているためでもある。橋下はトンネル道となっていて野川沿いを歩く場合はそこを通ります。



東八道路富士見橋を西側から見る

3).人見街道に架かる御狩野橋と相曽浦橋

御狩野橋は傾斜が急なので、緩やかに下る相曽浦橋が地元の人たちによって作られたそう。自動車で荷物を運搬する前の時代の人々の工夫が感じられます。



御狩野橋

4).大沢の里古民家の裏山にあたる国分寺崖線～出山横穴墓群 8 号墓（横穴墓と戦時中の防空壕）

崖線を利用し、古墳時代後半期（7世紀）に横穴状に掘られた墓の遺跡と、日中戦争中に軍用や個人用に掘られた大規模な防空壕の跡もあります。近くの龍源寺の新撰組隊長・近藤勇の墓の向かいに、この「横穴古墳供養 碑」と、防空壕で発見された人骨を供養した「穴佛」もあり、それぞれの時代に人々が崖に横穴を掘って利用してきたということがわかります。

また、大沢の古民家には崖線からの湧き水を利用した山葵田もあります。



横穴古墳供養碑につづくはけの散歩道

5).飛橋～はけ上へ階段の歩道橋（通称：七中階段：100 階段）～富士見テラス～

野川の飛橋と野水橋の中間付近の崖線には国立天文台の裏手に出る階段があります。この長い階段を上ると富士山や丹沢山系などが見張らせる崖上沿いの道に出ることができます。この遠景と国立天文台の森や竹林を眺めての散策はとても気持ちのいいものです。また、このあたりの地層が武蔵野礫層の模式地とされています。



七中階段：100 階段

6).工事中の野川大沢調節池

集中豪雨や台風などによる野川の増水による被害の対策として、大沢の野球場とサッカー場の地下を約3メートル掘り下げ、貯留量を拡大する工事をしていました。なんの層かはわかりませんが、立川面の土の層を見ることができました。



50 mm/時降雨対応整備を進める野川大沢調節池

7).調布飛行場展望台

東京都港湾局が運営する飛行場で、調布と大島・新島・神津島・三宅島などの島を結ぶ定期便の発着が行われています。日中戦争中、日本陸軍により使用され、戦後はアメリカ軍の占領をへて、1973年日本に全面返還されました。この展望台からは、セスナ機の離着陸や武蔵野の森公園の散策路や味の元スタジアムなども遠望できます。



調布飛行場展望台休憩室での会議の様子

8).武蔵野の森公園～掩体壕大沢1号2号（えんたいごう）

日中戦争中に陸軍調布飛行場に建設された航空機を格納する設備。少ない資材で大きな強度が得られるかまぼこ型をしています。史跡として保存されており、掩体壕大沢1号のそばには格納された「飛燕」の10分の1模型が展示されています。



掩体壕側に展示されている「飛燕」模型

（3）まとめ

三鷹市エリアの崖線は他のエリアとは状況が大きく異なることが理解できました。崖上にはICU キャンパス、国立天文台の一大施設があり、崖下には調布飛行場があります。これらは大正、昭和、平成の各歴史上に大きな役割を担っていた場所の上に立っています。

国木田独歩の『武蔵野』が発刊されたのは1898年、およそ100年前です。そこには人々が植林などによって作り上げた雑木林の美しさが描かれていました。その後、隣接の多磨霊園開園を皮切りに、国立天文台が麻布から移転、陸軍調布飛行場、中島飛行機研究所など国の政策による施設が建設され昭和の歴史がつくられていきます。戦後それらの施設は、米軍用地への接収と日本へ返還が行われ、跡地の利用として調布飛行場や関東村（後に警察学校、外語大、公園等に）、国際基督教大学、都立神代植物公園などが誕生しました。三鷹調布周辺は近現代史における歴史上の一大施設エリアだったことで国分寺崖線の環境が連続して残されているのです。

4. 地形図・インタビューから読み解く「はけ」の物語~~~~~

4-1. 「はけ」物語の視点

(1) 歴史の記憶から読み解く物語

「はけ」「崖線」を中心に置いた地域の歴史はどのようなものか、インタビューを行った記録、文学、古老の記憶などから、「はけ」の歴史を物語として読み解きます。

(2) 地図と地形から読み解く物語

「はけ」「崖線」に置いた地域の歴史はどのようなものか、地形図、古地図と重ね合わせる形で、遺跡、居住地の変遷、インフラ整備、土地利用の変化などの歴史から、「はけ」の歴史を物語として読み解きます。

(3) 自然や緑などの生態系から読み解く物語

「はけ」「崖線」に置いた地域の歴史はどのようなものか、動植物や自然生態系と地形図と重ね合わせる形で、「はけ」の歴史を物語として読み解きます。

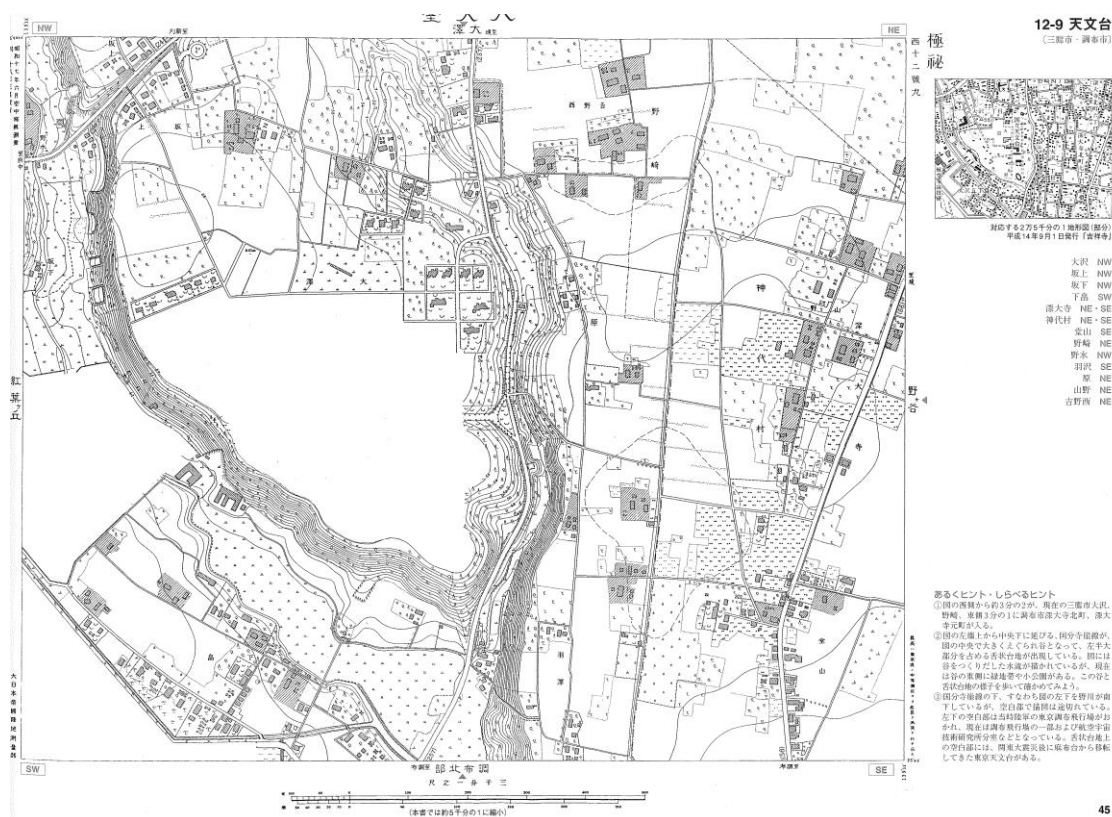


図 4-1 昭和 18 年 3 月地図 (国立天文台周辺)

4-2.インタビューから見える「はけ」の過去・現在・未来

1).人の住みはじめ

むかしむかし、あるところに大きな川があった。長い年月をかけて、川は大地を削り、やがて河岸段丘ができた。削られた縁の部分はゆるやかな崖になった。こうして、高低差 5～16m、長さ 25km に及ぶその崖が生まれた。

崖は、おおまかにいって南に傾いており、日当たりがよかった。また、付近には常にたくさんの水が湧いていた。水があり、日当たりがよく、眺めがよいこの土地に、古代の人々は暮らすようになった。

「野川沿いは、上から下まで本当に遺跡が多い。世界中、川のそばには遺跡があるが、ここだけめっぽう多い。暮らしやすい、だけではない魅力があったのだと思う。ひとつは私は景観だと思っている。縄文時代の富士山はいまの富士山と形が違うが、見えたことは確かだろう。景色がどうして大事かというと、当時の人たちにとってカレンダーがすごく大事。お日様がどこからのぼってどこへ沈むのか、星の位置がどうだとか、縄文時代には四季があったので、自然の恵みをいただいている生活の中で、この時期からこれが採れるとかの目安になる。日本全国で縄文人はそういうことをしていたらしいと言われている」（インタビュー：林さん）

「貫井遺跡の上なので遺跡は多く、雨が降ると土器のかけらがたくさん出た」（インタビュー：前田さん）

「このあたりはほじくるとやたら土器が出てきた。小学生のとき金属の刃物を発見した。先生に見せたら持って行かれてしまい、その後どうなったか分からない」（インタビュー：富永さん）

「天文台構内古墳は昭和 45～46 年と平成 16～21 にかけて調査をした結果、この古墳 7 世紀後半のもので全国的にも稀な上円下方墳と呼ばれる特異な形と判明し、平成 17 年度に国史跡に指定された府中市武蔵府中熊野神社古墳につぐ 4 例目となった。その他石器時代～縄文時代、石器時代の鍬などはいっぱい出てきたようだ」（インタビュー：中桐さん）

2).コメ作り、国府と寺

弥生時代になるとしかし、崖の周囲から人々の気配が急になくなってしまう。湧水が冷たく稲作に向かなかったため、みんなよそに移って行ったのだった。

崖や武蔵野が再び舞台に登場するのは大化の改新の後になる。中央集権化で全国の国が畿内五か国と七道に分けられ、武蔵国の国府が現在の府中に設けられた。また深大寺、武蔵国分寺も崖の近くに建てられた。武蔵国分寺については、この地が古代中国の信仰でいう四方の方角を司る霊獣、東の青龍・南の朱雀・西の白虎・北の玄武に守られていると考えられたという。

なお「武蔵野」の名が初めて史料に現れるのは万葉集だが、中世になると古今和歌集、後撰和歌集、新古今和歌集などに多数の歌の題材として詠まれるようになる。それらによると当時の“武蔵野のイメージ”は、「野草の野原」、「月の美しい、茫漠としてどこまでもつづく原野」といったものであったようだ。

「この辺は水があったから国分寺ができた。えらい坊さんだって、水がなきゃダメだ。昔の人は口伝えに聞いて、ここにしたんだろうと思う。多摩川が近くて、崖があって水が湧いていて、武蔵路（七道の一つ東山道と武蔵国府をつなぐ道）に近かった」（インタビュー：本多さん）

3).江戸時代と治水

武蔵野台地の水はけがよいため、坂下（崖の下）では豊富な水も、坂上では逆に貴重なものだった。江戸時代になると近郊で新田開発が進められ、これにともない、羽村から四谷まで玉川上水ができる。この上水は、水が貴重な武蔵野台地において非常に画期的なものだった。またこの時代に多摩川と荒川の分水嶺を正確になぞるなどの土木技術は、後世の人々も驚かせている。

「中村家は江戸時代の新田開発から 300 年続く、国分寺内藤新田の分家」（インタビュー：中村さん）

「江戸時代なんかははけの雑木林でみんな炭を作ったらしい」（インタビュー：本多さん）

「ここはおそらく享保年間に入植した。1700 年代。玉川上水ができる前。桧原の方から出てきらしい。養蚕がうまくいったようで、それで財をきずいたと。50 人ほど雇っていた」

「玉川上水から取っている分水、福生のくまがわ分水、野火止分水、砂川用水で取っている水をこの辺に引っ張ってきている。生活用水は 1 キロくらい汲みに行った。水は貴重だった。飲み水は家の井戸だった。はけを下って行くということは、遠かったのではなかった。母は関野町から来て、向こうは用水の水が流れていたの、嫁に来たての頃は水の使い方が荒いと言われていた」

（インタビュー：荒畑さん）

4).近代のインフラ整備と宅地化

近代に入ると、軍隊の移動と物資の輸送を担う鉄道建設が重要になってくる。中央線の前身である甲武鉄道は、まず明治22年（1889）に新宿－立川間が開通。当初は甲州街道沿いが計画されたが反対運動などもあり、抵抗の少ない武蔵野原野を、現在の東中野あたりから立川まで一直線に敷設された。

鉄道はひとつには養蚕のためでもあった。養蚕は、江戸時代後期に画期的な技術の開発があり、良質な生糸を生産できるようになっており、明治には隆盛期を迎え「外貨獲得産業」として近代化の礎を築いた。農家ではカイコガを「お蚕様」と呼ぶほどだった。

また多摩川は良い砂利がとれたため、東京の近代ビルや建設事業に役立てられた。現在の西武多摩川線は、もとは砂利や砂を運ぶための路線だった。

鉄道が開通し便が良くなったことと西欧で別荘が流行した影響で、明治末～昭和初期にかけて中央線沿線に多くの別荘が建てられた。代表的なものに殿ヶ谷戸庭園（旧岩崎別邸）・日立中央研究所（旧今村別荘）・滄浪泉園（旧波多野別邸）があるが、前田家の三楽荘もそのひとつといえる。

「曾祖父・前田武四郎が、大正年間に別荘としてこの家を建てた。当時は何もなかった。文献を読むと、坂に面した所に家を建てるのはステータスシンボルだったので、それで祖先は裕福だったのかなと思う。非常に風光明媚な土地だと感じている。日比谷公園を設計した造園の方が配置をしたそうだ」

（インタビュー：前田さん）

なお「三楽」の名前には孟子から取ったというもの（君子に三楽あり）と、もう一つ別の由来――前田武四郎・徳富蘇峰・頭山満の三人で憩える場所――がある。当時の財界、政界、ジャーナリズムの第一人者が度々ここに集ったわけで、（結果の良し悪しはおいておくとして）この崖から始まった大きな動きがあったといえるかもしれない。

【国木田独歩「武蔵野」（1898年〔明治31年〕）より】

「林と野とがかくもよく入り乱れて、生活と自然とがこのやうに密接している処がどこにあるか」と、国木田独歩が「武蔵野」に書いており、我々が「はけ」に感じる魅力（景観）の原風景が読み取れる。

5).第二次世界大戦～軍需工場の展開と空襲～

昭和初期になると、武蔵野には軍需工場や飛行場などが次々と進出してくる。今の国際基督教大学の場所は当時世界有数の航空機メーカーの中島飛行機があり、調布飛行場は陸軍の飛行場、東京経済大学と早稲田実業学校は大倉財閥系の南部銃製造所という兵器工場、昭和記念公園は立川陸軍飛行場だった。そのため、この周辺は空襲も激しかった。

「昔は大沢は豊かな農村という感じ。調布飛行場ができて変わってきた。昭和 12～3 年頃から買収を始めた。軍ではなく東京府が。私のところも畑などたくさんあったが全部とられた。宅地まで。だんだん工場や飛行場にとられていった」

(インタビュー：榛澤さん)

「もともと持っていた八町歩の畑はおおよそ陸軍技術研究所（今の学芸大）になってしまった。全部買収された。終戦後返すという法律ができたが、結局一部だった。その頃は売るのは 3 円から、高くても 5 円だったが、買ったのは 15 円。畑地の方は借りた。父は大変な苦労をしたと思う。土地を借りてなんとか生きてきたことを忘れるなと言われた」

(インタビュー：荒畑さん)

「本多家はリオンの向こうまで土地はあった、戦前の領地買収で持って行かれた。リオンの前は小林理学研究所といって軍事産業の研究なんかもしていた。太平洋に浮かんでいる敵の戦艦を探知する研究なんかもしていた。その研究を利用して補聴器や魚群探知機などになった。そういう研究が軍の力で飛躍的に進化した。農薬会社もそう。殺虫剤も、毒ガスの研究なんかから発展している」

「空襲の記憶はある。この家すれすれに B29 がきた。中央線を目印にくる。日立めがけて本多のあたりに落とされた。中島飛行機が一番やられた。戦争も、もう少しもう少しと思って頑張った。そういう教育だった」

(インタビュー：本多さん)

「戦中はタヌキやウシガエルも食べた。タヌキ汁は美味しかった。キツネ、ヘビ、ウサギは美味しくない」

(インタビュー：富永さん)

6).高度成長期の急激な宅地化

高度成長期では、武蔵野でも大きく発展するが、同時に環境の問題も出てくる。崖線はその地形から部分的な都市開発にとどまるものの、野川の様相の変化は大きかった。

「高度成長期になると下水が田んぼに入って、稲がみんなバカになっちゃう。実が入らずスカスカになる。下水がみんな田んぼに流れ込んだので、石けん水がすごかった。それでお米が臭くなる。売れないし食えない。それで、昭和36年くらいに田んぼはやめた」

（インタビュー：本多さん）

「子どもの頃は湧水は多かったけど、宅地化やアスファルトの道路、下水に水が流れて湧水がなくなった。野川は今はけっこう水があるのが、まえは全然なかったし「どぶ」だった。ゆすり蚊が多かった。子どもの頃は野川で水遊びをした。うなぎをとっていた。獲れる魚はみんな食べられた。だんだん水が汚れた。特に上流に碎石工場か何かができて、それを洗う水が真っ白の時期があった。国分寺の方の電車庫の排水とか」

（インタビュー：榛澤さん）

7).「はけ」のこれから

このように日本の来し方を古代から眺めてきたともいえる崖と武蔵野。この先はその原風景の面影を残すために、何をすべきだろうか？

「遺跡のことなどを含め学校などで、ここがどういう土地なのか、まずは子供たちに残していくようにしたい」

(インタビュー：前田さん)

「今のまま残してほしい。都市計画がきちんと出来ていない。(都市道路計画整備に) STOP をかけるのは今しかない」

(インタビュー：富永さん)

「これからどうなるか分からないが、なるべく現状のまま維持してほしい。自然が長いスパンで変わっていくのはいいが、人間がいきなりガンガン変えてしまうのはあまりうれしくない」

(インタビュー：林さん)

「行政の立場で世田谷、国分寺と順次実践した『崖線フォーラム』に関わった。はけについては農家である当事者としてもよく理解しているつもりであるので、はけの農家がつながることができたらが理想」

(インタビュー：中村さん)

5. 「はけ」地形を楽しむツールづくりの検討~~~~~

5-1. 検討の視点と方針

高齢者だけでなく、多様な世代の参加することで、「はけ」を軸とした新たなローカルアイデンティティの醸成を目指し、はけの魅力を発掘しながら、これを体感するメディアづくりを目標として、「はけ」の地形を楽しむツールづくりを検討、具体化を進めました。

視点1：はけの存在と魅力を示す地図の作成

視点2：地形図をメインに「はけ」の魅力・課題・可能性を発信するメディア検討・具体化

視点3：国分寺崖線沿いで様々な人材・団体が行っている研究やイベントを発信するメディアの検討・具体化

視点4：誰でもが「はけ」の魅力を体感できるプログラムの検討・具体化

5-2. はけの存在と魅力を示す地図の作成

（1）地図検討の視点

「はけ」の最大の特徴は東西方向に連続する崖状の地形、すなわち地形の高低差にあります。地形の高低差は、地図上では「等高線」によって表現されます。しかし子どもたちや、地図が苦手な人たちにとっては、地図の等高線から地形の特徴を読み取ることは難しいものです。そこで、「はけ」の存在と魅力を示す地図として、等高線を読まずとも地形の高低差を視覚で理解できる地図の検討を進めました。

（2）凸凹（でこぼこ）地図とは

地形の高低差を視覚で理解できる地図として、株式会社東京地図研究社協力のもと、凸凹（でこぼこ）地図を作成しました。この凸凹地図は、地形の起伏を陰影で表した陰影図と、標高をカラーで色分けして表わした段彩図を重ね合わせ、地形の起伏を表現した地図表現の陰影段彩図のことをいいます。凸凹地図という名称は、東京地図研究社が「誰もが親しみやすい名称を」という思いから、2006年に命名しました。

5-3.タブロイド版の作成の検討

(1) 目的

これまで、はけの学校で実施してきたシンポジウムや鼎談などの成果を共有し、広く、多摩地域の住民に「はけ」の魅力・課題・可能性に関する情報を知っていただくことを目的として、メディアの検討を行いました。

(2) メディアの選択

多摩丘陵などに比較して、「はけ」は高低差が小さくなく、地図を見ても地形を意識することが少ないので、本研究で作成する地形の高低差を強調した地図をメインに、「はけ」に関する魅力・課題・可能性が一目で分かるような、「タブロイド判」でメディアを作成することとしました。

(3) 検討の進め方

FACEBOOK を通じて、参加を呼びかけ「はけ本アイデア会議」を実施、様々な立場からの検討を行う、コンテンツ、制作の進め方、メディアのあり方などについて意見交換を行いました。

第1回はけ本アイデア会議

日時：2018年10月 場所：小金井アートスポットシャトー2F

参加者数：22名

第2回はけ本アイデア会議

日時：1月12日 場所：小金井アートスポットシャトー2F

参加者数：15名



第1回はけ本アイデア会議の様子

(4) コンテンツ

武蔵野の緑縁まちづくり鼎談～国分寺崖線の「みどり」と「まち」と「みち」の関係を考える～（日時：2018年7月28日（土）10：30～12：30、会場：小金井環境学習館）をメインのコンテンツとして、これに、地形図を組み合わせ、タブロイド判の作成を行うこととしました。

りよくえん ていだん
武蔵野の緑縁まちづくり鼎談
～国分寺崖線の「みどり」と「まち」と「みち」の関係を考える～

【趣旨】
縄文期そして武蔵国分寺の時代から、国分寺崖線の緑や水などの自然環境が、武蔵野地域の生業や生活を育んできました。現代の地球温暖化や環境破壊の時代に至り、もう一度、武蔵野地域全体の骨格となる、国分寺崖線の「みどり」と「まち」と「みち」の関係を問い直し、地域の社会資本を支える、次世代に引き継ぐべき環境資産として国分寺崖線の自然環境と開発のあり方を考え、いかに継承していくか、崖線沿いのまちづくりの担い手とともに、以下の3名の方に語っていただく、『武蔵野の緑縁まちづくり鼎談』を企画しました。

【原談者】
國分功一郎：東京工業大学教授／リベラルアーツ研究教育院
河村 孝：（公財）三鷹国際交流協会理事長／前三鷹市副市長
佐藤 留美：（NPO）birth 事務局長／東京の緑を守る将来会議代表 敬称略・順不同

【主催・協力】主催：はけの学校 協力：（NPO）グリーンネックス
【日時】2018年7月28日（土）10：30～12：30 ＊終了後交流会（12：30～13：30）を開催します。
【会場】小金井市環境学習館（住所：小金井市貫井南街3丁目2-16）

【プログラム】
1）趣旨説明 土肥英生 （NPO）グリーンネックス
2）環境学習館紹介 前田幸則 （NPO）グリーンネックス建築デザイン室
3）鼎談1：武蔵野の「みどり」
話題提供：佐藤留美 東京の緑について国分寺崖線（はけ）の役割
4）鼎談2：武蔵野の「みち」
話題提供：國分功一郎 小平市における道路計画問題から『来るべき民主主義』
5）鼎談3：武蔵野の「まち」
話題提供：河村孝 武蔵野の風土・生業を活かしたまちづくりについて
6）フリートーク

【参加費】
資料代：800円 交流会参加費：700円（飲み物、お弁当）

【お願い】
・この企画は、はけの学校の冊子制作のための企画となります。参加者は招待者のみとなっております。
・撮影・録音を行います。参加者の顔写真、ご発言なども冊子に掲載されることがございます。掲載不可の方がいらっしゃいましたら、事前にスタッフにお申し出ください。
・会場の環境学習館は、環境配慮住宅型研修施設です。自然の力を活用し夏は涼しく過す建物機構が備わっていますが、冷房の設備はありません。ご自身の体調等に合わせ団扇や保冷剤などのご準備をお願い致します。

【問い合わせ先】
はけの学校/（NPO）グリーンネックス 野口由紀子 TEL：042-385-3191 E-mail：noguparty4@gmail.com

図 5-2 武蔵野の緑縁まちづくり鼎談案内

(5) 資金調達

本研究・検討を土台に、2019年4月にクラウドファンディングを行い、沿線の企業の協賛を得て、発行することを目指すこととなりました。



図 5-3 タブロイド判・はけの学校トップページ構成案

5-4,WEB「はけの学校」の検討と制作

(1) 目的

はけ周辺及び国分寺崖線の魅力は坂の多い変化に富んだ地形と、その地層から湧き出る清涼な地下水、その恩恵を受けた雑木林や野川などの美しい風景。それは散策などの体感で得られることと同時に、地形図や地図、その場所に生きた人のエピソード、土地の記憶など知識で得られるものの2種類があります。

この2つを知識の情報提供とガイドウォークの開催と報告という形で、リンクさせつつ楽しめるツールとして、ホームページを構成しました。

(3) デザインと内容

●Top ページ

- ・はけおよび国分寺崖線の風景や自然の豊かさを感じさせる写真を掲載。3枚の写真がスライドショーを展開します。
- ・リサーチ、イベント、ライブラリーとコンテンツを絞って、誰にでもわかりやすいページ構成にしています。



● はけの学校とは

- ・「ハケ」とはなにかの解説とはけの学校の活動動機の紹介。国分寺崖線の概要地図を掲載します。

はけの学校

はけの学校とは リサーチ イベント ライブラリー リンク集

はけの学校とは

HOME / はけの学校とは

メニュー

はけの学校とは

ライブラリー

リンク集

リュエル・スタジオ

カテゴリー

リサーチ

イベント

ライブラリー

検索

国分寺崖線と「ハケ」

古多摩川が武蔵野台地を削り取った河岸段丘で、斜面地が立川から世田谷まで30kmも続く地形を国分寺崖線と呼びます。そこには武蔵野の面影を残した雑木林や、斜面から染み出す湧き水による小河川や湧水池などがあり、豊かな自然環境が残されています。また、崖線の上からは富士山や丹沢山系などが眺望でき、遺跡や寺院などの史跡も多く、古いお屋敷なども残されています。そのため東京都の景観基本軸にも指定されており、その優れた環境を保全していく取り組みもあります。

「ハケ」とは、国分寺崖線が湧き水によって侵食された地形を小金井あたりの土地の人々が呼び習わしていた言葉のようですが、大岡昇平の「武蔵野夫人」にも登場し、いつしかその付近の地形も含め、親しみを込めて「ハケ」と呼んでいます。

ハケを知りハケから学ぶ

「はけの学校」は、小金井のはけを中心に国分寺崖線全体を見据えて、その魅力や重要性を紐解き、伝え残すためにはどうしたらいいのか？ 宅地開発がさらに進み、新しい住人が増えていくとその斜面がなぜあるのか、かつての人たちはどのようにこの斜面の恩恵をうけていたのか、その重要性がますます薄れて忘れられてしまいます。

私たちは、土地を歩き風景を紹介するガイドウォークや、そこで暮らす人々の声や想いを集めるなどの情報収集を通して、国分寺崖線のように未来に残していくかを考えております。

● リサーチ

- ・ はけの学校にて聞き取り調査をした内容や、実際に歩いて得た実感や感想をレポートします。

はけの学校

はけの学校とは リサーチ イベント ライブラリー リンク集

リサーチ

HOME / リサーチ / 国分寺崖線@大沢

メニュー

はけの学校とは

ライブラリー

リンク集

リュエル・スタジオ

カテゴリー

リサーチ

イベント

ライブラリー

検索

最近の投稿



国分寺崖線@大沢
📅 2019年2月20日



2018年12月7日(金) まちのカルチャーカフェ「みんなであそぼう」
なで巻を走った、か？ 武蔵野台

📅 2019年2月20日 / 最終更新日: 2019年2月21日 📝 hakeschool-wpid

リサーチ

国分寺崖線@大沢

2019年2月8日(金)くもり

参加者: 6名

今回は一般社団法人武蔵野コッツウォルズの鈴木俊彦さんをガイドにお招きして、三鷹市大沢付近の国分寺崖線をリサーチしました。

武蔵野コッツウォルズは、東京郊外の武蔵野地域が英国ロンドン郊外の人気観光スポット「コッツウォルズ」にも共通する自然豊かな場所と考え、散策やジョギング・サイクリングなどでこの地域をたくさんの方が楽しめるよう推進する活動をされています。

1: 野川公園一之橋上りバス停集合～野川公園一之橋北口

現在、東八道路（道幅30メートル）は歩道と自転車レーンの整備工事中で、2020年東京オリンピックでは自転車競技の開催地となるそうです。

2: 東八街道富士見大橋下のトンネル

東八道路と旧道の人見街道交差点は富士見橋という名前のとおり、富士山がよく見えます。このあたりの崖線は富士山の方角である西に向いているためでもあります。橋下はトンネル道となっていて野川沿いを歩く場合はそこを通ります。

● イベント

- ・ はけの学校が関連するイベントの紹介・募集とそのレポート。できるだけ参加できなくても、内容がわかるような詳細な報告をします。

はけの学校

はけの学校とは リサーチ **イベント** ライブラリー リンク集

メニュー

はけの学校とは

ライブラリー

リンク集

リュエル・スタジオ

カテゴリー

リサーチ

イベント

ライブラリー

検索

最近の投稿



国分寺座敷@大沢
2019年2月20日



2018年12月7日（金）まちのカルチャーカフェ「みんなで考えませんか？武蔵野台地の水が生み出した人々の暮らしについて。」
2019年2月20日



2018年11月24日（土）、25日（日）国分寺ぶんぶんうおーく2018「はけの緑線をマッピングしよう」展示出展

2019年2月20日 / 最終更新日：2019年2月20日 hakeschool-wpid イベント

2018年12月7日（金）まちのカルチャーカフェ 「みんなで考えませんか？武蔵野台地の水が生み出した人々の暮らしについて。」

@東京学芸大学図書館カフェ note café

主催：まちのカルチャーカフェ・プロジェクト

協力：東京学芸大学、東京学芸大学図書館カフェ note café、はけの学校



67

●ライブラリー

- ・はけの学校が制作した冊子などを紹介するとともに、はけや国分寺崖線の記事がある書籍などを紹介する。同時に公共施設に設置した「はけのライブラリー」の紹介をし、実際に手に取ることができることを紹介します。

はけの学校

はけの学校とは リサーチ イベント ライブラリー リンク集

ライブラリー

HOME / ライブラリー / はけの学校 絵てびき 「はけ」ってなーに？

メニュー

- はけの学校とは
- ライブラリー
- リンク集
- リュエル・スタジオ

カテゴリー

- リサーチ
- イベント
- ライブラリー

検索

最近の投稿



国分寺崖線@大沢
2019年2月20日



2018年12月7日（金）まちのカルチャーカフェ「みんな考えませんか？武蔵野台」

2019年2月14日 / 最終更新日：2019年2月14日 hakeschool-wpid

ライブラリー

はけの学校 絵てびき 「はけ」ってなーに？

2017年発行 絵・高安恭ノ介

国分寺崖線およびハケとは何かを絵てびきとして、誰にでも親しみやすいよう1枚のパンフレットにまとめました。武蔵野台地と国分寺崖線の関係やその地形の由来、地下水が湧く仕組みなどが、穏やかなイラストで解説されています。また、石器時代の遺跡から現代の水質悪化と再生の歴史も紐解きます。裏面は国分寺崖線の概要がわかるイラスト地図になっています。頒布価格100（税込）でお分けします。



●リンク集

- ・はけの学校に協力している団体や個人を紹介します。

はけの学校

はけの学校とは リサーチ イベント ライブラリー リンク集

リュエル・スタジオ

HOME / リンク集 / リュエル・スタジオ

メニュー

はけの学校とは

ライブラリー

リンク集

リュエル・スタジオ

カテゴリー

リサーチ

イベント

ライブラリー

検索

リンク集

リュエル・スタジオ

地域雑誌「き・ま・ま」を制作する編集プロダクション。小金井を拠点とし、はけ周辺のカルチャーや地元の人たちを丹念に取材し、物語のある写真と文章に定評のある雑誌となっている。年1回発行、国分寺産線周辺の書店等で販売。

<http://ruelle-studio.net/kimama.html>

き・ま・ま

大特集
はけに
生きる技

地元がいちばんおもしろい
はけ周辺のひと暮らし、時を遊び

Nov. 8

小説「蟹喰丸」
中田永一



5-5.街歩きプログラムのためのアプリ作成に向けて専門家ヒアリング

(1) ヒアリング対象者

湯原 勇太 株式会社サプラニア代表

【サプラニア事業内容】

- ・ イベントサイト「サプラニア」の運営
- ・ 地域活性化のためのイベントの企画・運営
- ・ 遊園地等のアトラクションの企画・製作
- ・ イベントを利用した広告代理業務
- ・ デザイン・広告制作業務



図 5-1 サプラニア HP

(2) ヒアリング日時・場所

日時：2018 年 11 月 9 日 11：00～

場所：シャトー 2F

ヒアリング担当者：鈴木佳子、土肥英生、野口由紀子、横田右近

ヒアリング内容：「はけ」を対象とした街歩きプログラムの可能性と検討の進め方について

(3) ヒアリング結果

下記のような視点に基づき、「はけ歩き」とリンクした携帯アプリの可能性について、ヒアリングを行いました。

視点 1：場所の魅力を知るゲーム性（参加しやすさ）

視点 2：場所の物語と個人の物語の共感性

1) 「はけ」を対象とした街歩きプログラムの可能性について

●外で街歩きするファミリー層の減少を踏まえるべき

- ・ 土日、街歩きをするファミリー層が少しづつ減少している。その理由は、ゲームを自宅で楽しむファミリーが増えて、週末はあまり街場に出てこない。商店街への集客も、商圈を越えて客を呼び込む戦略になりつつある。

このため、街歩きプログラムを考えるためには、外に出る世帯が減少していることを踏まえる必要がある。

●キャラ活用を考えたい

- ・とっつきやすいキャラを活用した、街歩きプログラムを考えることは効果的であり、武蔵野市で行っているが、評判も高く、集客力も高まっている。
- ・双六のように、街歩きをするとポイントが貯まり、商品が安く買えるなど、消費と関連付けることも考えられる。

2) 「はけ」を対象とした街歩きプログラムの兼用の進め方について

●検討の手順について

- ・ゲーム性のあるプログラムをデザインにするには、コストと手間がかかるので、まずは、はけ歩きルートやそこで知ってもらいたい。
- ・はけの魅力ポイントなどを調べる作業を先行させるべきである。
- ・アイデア出しなどは、協力をしていきたい。

6. 今後の課題と計画~~~~~

6-1.課題

本年度研究を通じて、以下の諸点が明らかになりました。

- 「はけ」に関する地形と歴史、ライフヒストリーが密接に重なっており、多くの魅力的なエピソードがあること
- 「はけ」有史以前からの「はけ」の地形と土地利用の変化を体感できる場所であること
- 「はけ」の魅力を発信する共有するツールとして、3タイプ（タブロイド版・はけの学校、WEBメディア、街歩き(緑縁プログラムアプリ)のメディアを組み合わせる方向性が明らかになったこと

以上を踏まえ、次年度以降の課題を整理すると以下の図の通りとなります。

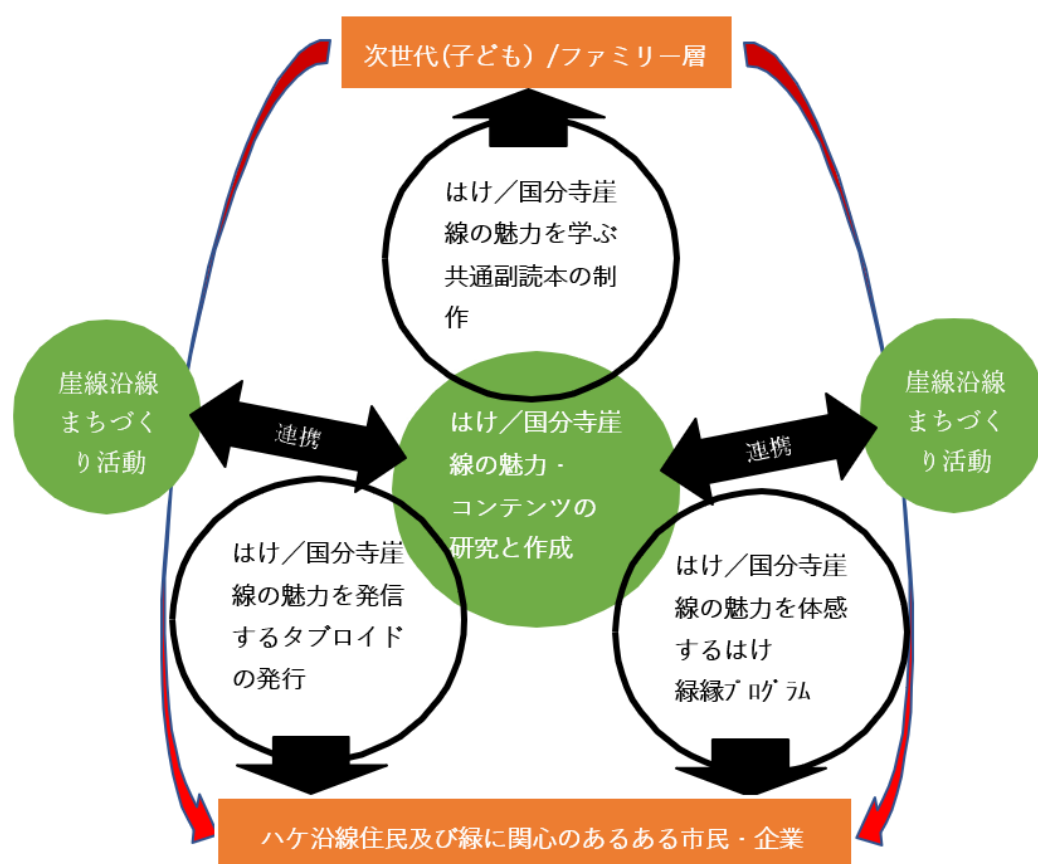


図 6-1 具体化を目指す「はけ」メディア展開イメージ

6-2.今後の計画

(1) はけ／国分寺崖線の魅力を発信するタブロイドの発行

本協働研究助成を受け、制作検討を進めた、はけの学校のタブロイド判について、企画を作成し、企業賛助やクラウドファンด์を受け、発行を目指し、活動を進める予定です。

タブロイドを幅広く、崖線沿線の住民や緑に関心のある団体へ届けるため、駅における配布や展示スペースの確保など、様々な場における配布・掲示方法を検討していきます。

(2) はけ／国分寺崖線の魅力を体感するはけ緑縁プログラム

本年度検討した「はけ」の魅力掘り起こしを行う「はけ歩き」を継続実施し、「はけ歩き」の魅力スポット、地形、歴史、市民活動等のエピソードを集約し、はけ／国分寺崖線の魅力を体感する「はけ歩き」緑縁プログラムとして、まとめ実施する体制づくりを進めます。

また、同プログラムの展開を支えるツールとして、「はけ」を舞台に、時間軸を様々なダンジョンとする地図を作成、これをスマートマップを活用して展開、誰もが「はけ」歩きを通じて、「はけ」の魅力と価値を体感できるアプリケーションの企画・開発を進めます。

(3) はけ／国分寺崖線の魅力を学ぶ共通副読本の制作

子どもたちも参加する東京学芸大学公開講座において、はけ／国分寺崖線の魅力を学ぶ共通副読本制作に向けて、「はけ」の歴史・魅力を体感するワークショップを実施、はけ／国分寺崖線の魅力を学ぶ共通副読本の企画案を作成、沿線の大学などとも連携し、共通副読本の制作の具体化を進めます。

(4) WEB「はけの学校」を通じた行政域を超えたまちづくり団体の連携

三鷹市より東側、国分寺市より西側の、国分寺崖線については、本年度の研究では情報を把握していません。

このため、一般社団法人武蔵野コッツウォルズや東京の緑を守る将来会議などの協力を得て、国分寺崖線全体の行政域を超えたまちづくり団体の連携を進め、WEB「はけの学校」を通じて、情報共有を図るプラットフォームづくりを進めます。

Produced by
もはけの学校き

どっき土器! 崖線実踏

縄文遠足

水と緑に恵まれた日当たりの良い斜面地である国分寺崖線（はけ）は、古代から人が住み着いた場所で、多くの遺跡が発見されています。考古学の先生と一緒に、野川遺跡と横穴墓をめぐって歩きましょう。

日にち 2017年6月3日(土)
時間 10時～12時
集合場所 ICU 湯浅八郎記念館前
国際基督教大学キャンパス内（三鷹市大沢三丁目10-2）
☎ 0422-33-3340

コース 湯浅八郎記念館（野川遺跡）～人見街道～大沢の里・出山横穴墓群 8号墓見学～水車経営農家 見学～現地解散

参加費 1,000 円（資料代込）
募集人数 30 名
主催・申込み はけの学校（NPO法人グリーンネックス）
☎ 042-385-7025 ✉ coconblend@gmail.com
後援 三鷹市

案内人：林 徹
先史考古学が専門。国際基督教大学講師。毎年近隣の小学生に日本の先史時代を解説している。なぜはけの周辺には遺跡が多いのか、環境との関係を現地で語る！

コースイメージ
野川、武蔵野公園、多摩公園、西武池袋線、東八道路、野川公園、湯浅八郎記念館、国際基督教大学、人見街道、水車（新車）↑、横穴墓群、多摩駅

一般財団法人
セブン・イレブン記念財団

① 移転前の屋敷の様子。1908年に建てられました。（写真提供：小金井市）② 敷地の半分は墓の丘と成る。③ 墓が足りず屋敷でも墓を掘削し、その横で建てたという文夫さん。7人兄弟。④ 堀は兄の盛さんにより1902年に建てられた。⑤ 強制買収された一帯は終戦まで陸軍陸軍研究所。1949年には東京学芸大学となったが、屋敷林の一部は残った。（photo：大瀬善世）

グラウンド門からクロマツの並木道を進むと、左手にひっそりと建っている「けやきの碑」。周りの7本のけやきは、戦前ここに住んでいた荒畑家の屋敷林の名残だ。およそ300年前の8代将軍吉宗の頃、玉川上水の分水開始にともない坂上に入植した人々は、ケヤキ、カシ、マツなどを防風のため屋敷の周りに植えた。荒畑家は広大な土地で多くの事公人を抱え農業を営んでいたが、1941年に軍による強制買収で農地を奪われ小作人となった。屋敷は2か月かけて現在の公民館貫井北分館辺りまで約650m曳家した。学芸の森敷地の折は、在りし日の農家の営みに思いをはせてほしい。

けやきの碑
荒畑文夫さん
interview by 田村美実

東京学芸大に残る農家の防風林